

史跡 平出遺跡

—昭和57年度発掘調査報告書—

1983

塩尻市教育委員会

史跡 平 出 遺 跡

——昭和57年度発掘調査報告書——

1 9 8 3

塩尻市教育委員会

序

平出遺跡は昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての幾多の貴重な資料が発見され、昭和27年3月には国の史跡に指定されました。

しかし、史跡指定から既に30有余年の歳月が経過し、この指定地が市街地に隣接していることもあり宅地化の傾向が見え始めてまいりました。このため塩尻市教育委員会では昭和50年から51年度にかけて文化庁ならびに県教育委員会の指導のもとに平出遺跡保存管理計画が策定されました。この保存管理計画に基づき、国、県の補助事業として、昭和54年度から昭和56年度の3ケ年にわたって遺構確認調査を実施し、また、昭和56年度からは3ケ年計画で指定地域内の公有化をすすめ、あわせて昭和57年度から公有化地区の環境整備を実施することになりました。

昭和57年度には、公有地の外柵設置と今後の整備の資料を得るための発掘調査を計画、実施いたしました。調査にあたっては、花村格先生を団長に、調査員には中信考古学会の先生方に、また調査補助員には信州大学考古学研究会を中心とする大学生にお願いしました。初冬の寒さの中で献身的な御尽力を賜りました。また、今回の発掘調査が所期の目的を達し、無事終了できましたことは、平出区長中野元弘氏、平出遺跡会長市川琢磨氏をはじめ、地元の方々の深い御理解、御援助によるものであります。ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和58年3月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優 一

例 言

- 1 本書は塩尻市教育委員会が長野県塩尻市大字宗賀平出所在の史跡平出遺跡公有化地域の発掘調査を昭和57年度国、県の補助事業として実施した報告書である。
- 2 調査は、平出遺跡発掘調査団（団長 花村格）に委託し、現場での調査は昭和57年11月20日から11月29日まで実施した。
- 3 遺物および記録類の整理作業から報告書作成までは平出遺跡考古博物館において昭和57年12月から昭和58年3月まで行った。
- 4 本書は、花村団長を中心とし、調査員、調査補助員の共同討議の上で執筆した。
- 5 調査にあたっては、平出区長中野元弘氏をはじめ地元平出区の方々に多大な御配意、御援助をいただいた。ここに銘記しお礼としたい。
- 6 出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

目 次

序文

例言

第 I 章 調査経過	1
第 I 節 発掘調査の経過	1
第 2 節 発掘調査の方法	2
第 3 節 調査日誌	3
第 II 章 遺跡の概要	4
第 1 節 遺跡の位置	4
第 2 節 調査の要約	7
第 III 章 遺構と遺物	9
第 1 節 今回新たに発掘された遺構と遺物	9
(1) 第十号住居址	9
(2) 第61号住居址	12
(3) 第62号住居址	15
第 2 節 既発掘の遺構と遺物	22
(1) 第 1 号住居址	22
(2) 第 2 号住居址	22
(3) 第11号・22号住居址	26
第 3 節 遺構に伴わない遺物	33
(1) 土器	33
(2) 石器	37
第 IV 章 結語	42

挿図目次

- 第1図 平出遺跡位置図
- 第2図 史跡指定地全体図
- 第3図 遺構配置図
- 第4図 発掘区全体図
- 第5図 第1号住居址
- 第6図 第1号住居址出土土器・石器
- 第7図 第61号住居址
- 第8図 第61号住居址土器・鉄器出土状態
- 第9図 第61号住居址出土土器・鉄器
- 第10図 第62号住居址
- 第11図 第62号住居址カマド
- 第12図 第62号住居址土器出土状態
- 第13図 第62号住居址出土土器
- 第14図 第62号住居址出土土器・石器
- 第15図 第1・22号住居址
- 第16図 第2号住居址
- 第17図 第2号住居址出土土器
- 第18図 第11・22号住居址
- 第19図 第11号住居址出土編み物用石錘Ⅰの(1)
- 第20図 第11号住居址出土編み物用石錘Ⅰの(2)
- 第21図 第11号住居址出土編み物用石錘Ⅱ
- 第22図 第11号住居址出土編み物用石錘Ⅲ
- 第23図 編み物用石錘の長さとの幅の相関
- 第24図 編み物用石錘の重量と長さの相関
- 第25図 遺構外出土土器
- 第26図 遺構外出土縄文土器
- 第27図 遺構外出土弥生土器(1)
- 第28図 遺構外出土弥生土器(2)
- 第29図 遺構外出土石器(1)
- 第30図 遺構外出土石器(2)

第 I 章 調査経過

第 1 節 発掘調査の経過

平出遺跡は、昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行なわれ、縄文時代から平安時代にわたる集落が東西1 Km、南北300～400mの範囲にわたって展開していることが判明した。この調査結果に基づき、昭和27年3月に国の史跡に指定された。その後、この指定地が市街地に隣接していることもあり、宅地化の傾向がみえはじめた。このため、文化庁、県教育委員会の指導のもとに昭和50年、51年の両年にわたり、史跡の保存と活用面における指針を盛り込んだ保存管理計画の策定を行った。この中で、(1) 遺跡内未調査地区の遺構確認調査、(2) 指定地内の公有化、(3) 史跡の活用方法について述べられており、現在この指針にもとづいて事業が進められている。すなわち、(1)については、昭和54年～56年度にかけて史跡指定地の東、北、西部地域の遺構確認調査が実施され、また、(2)についても昭和56年度から土地の公有化を進めているところである。(3)の活用については、公有化された地域を中心として、復原家屋の建設、外柵の設置、植栽などの整備を昭和58年度以降実施予定である。そこで、今後の環境整備のための資料、殊に、復原家屋を建設するための住居址の検出および遺構の分布状況等を明らかにすることを主目的とした発掘調査が計画され、実施された。

発掘調査は昭和57年11月20日～11月29日まで行ない、以後引き続いて3月まで記録類、遺物類の整理作業、報告書の刊行を行なった。

調査にあたっては、調査団長を前平出遺跡考古博物館長花村格氏にお願いし、調査員には中信考古学会の諸先生に、また調査補助員には信州大学考古学研究会をお願いした。

調査団の構成は次のとおりである。

団長 花村 格

調査員・調査補助員 小林康男、島田哲男、大竹庄司、奥山元彦、小嶋秀典、深井幸人、前田清彦、掘田直人、金子順一

一般 小池国蔵、川上光雄、内川幸治郎、内川なお江、荻上宗樹、田村美代、田村しづか、西村忠雄、中村泰、大塚あさの、川上みどり、上條由美、小口ゆかり、川上美代治、加納哲美、大沼田一枝、市川増雄、市川みえ、松井光子、武井豊子、征矢野公子、曾根原康一、曾根原正子、高橋たづ江、林みつ江、林正千代、丸山せき子、加納宣子、由上はる美、米久保近江、赤岩朝嘉、岡田美津江、山下敦、中川重行、唐沢隆幸、武居邦浩、武居千津子

市川忠宏、大下今朝好、大下かめよ、赤沢繁幸、小沢克雄、上條智、古谷広樹、武井公恵
塩原しず子、高橋ふみ、川上誠、林俊一、小林洋子、鳥羽嘉彦、中野実佐雄

第2節 発掘調査の方法

発掘調査にあたっては、昭和25年の第一次調査によって発掘が実施されたBおよびOトレンチを除く地区を中心として実施した（第3、4図）。

調査は、東西方向にA～Oトレンチ（長さ27m～33m、幅3m）を設定し、B・D・G・I・Oトレンチを発掘し、遺構が検出された地区については拡張した。なお、昭和25年に既に調査済みの第11号、22号および、1号、2号も正確な位置関係、内容を知るために再発掘を行なった。

遺物は各遺構ごとに出土地点、前位及びレベルを記録して取り上げることに務めた。

調査面積822㎡。

第3節 調査日誌

11月20日（土）朝9時に全員現地に集合し、花村団長より発掘の目的等を含めた挨拶があり、その後、調査の諸注意につき説明があり、直ちに発掘に入る。Kトレンチの掘り下げを実施。攪乱もなく、土層の推積状態は良い。縄文中期と弥生中期の土器片が出土する。午後、2軒の住居址を確認する。

11月21日（日）K、G、B、Dトレンチの掘り下げとともに、昨日確認された住居址を発掘するためJトレンチを拡張する。なお、住居址完掘のための除土作業が困難のためバックホー、ダンプによって除去を行う。

11月22日（月）B、I、K、Jトレンチの掘り下げを続行。B、Dトレンチはローム層面まで攪乱が及んでおり、遺構は全く検出されず、出土遺物も極めて少ない。

11月23日（火）B、Dトレンチのセクション図作成。K、Jトレンチの住居址（第61号）のセクション図作成。ベルト除去。炭化材が目立つ。J、Kトレンチ10、11区で住居址が確認される（第1号住居址）。

11月24日（水）Oトレンチ1～2区および3～4区において住居址と思われる落ち込み検出。また、第11号住居址も確認される。第1号址は完掘すべく拡張する。第2号址を確認する。

11月25日（木）第1、2号住居址の検出。Oトレンチ1～3区、3～4区の住居址完掘のためPトレンチを拡張する。第11号址完掘のためバックホーにて廃土を除去する。

11月26日（金）第1号址の写真撮影。第11号址の掘り下げ。床面上より編み物用石錘が出土し、注目される。Oトレンチ1～3区（第62号址）の掘り下げとセクション図作成。Oトレンチ3～5区（ナ号址）のセクション図作成。

11月27日（土）第11号址の掘り下げ、第2号址の柱穴、北壁調査。ナ号址の精査と写真撮影および平面図作成。第61号址の床面精査と平面図作成。

11月28日（日）第11号址の精査、写真撮影。第62号址の床出しとカマド精査。第2号址の平面図作成。第61号址の平面図作成およびカマド内の遺物取り上げ。

11月29日（月）第62号址の平面図作成、カマド内の土器取り上げ。本日で現場における作業を終了。

12月～3月 遺物の洗浄、注記、実測、遺構図面の整理、製図、図版組みを行ない、同時に原稿の執筆、報告書の印刷。

（事務局）

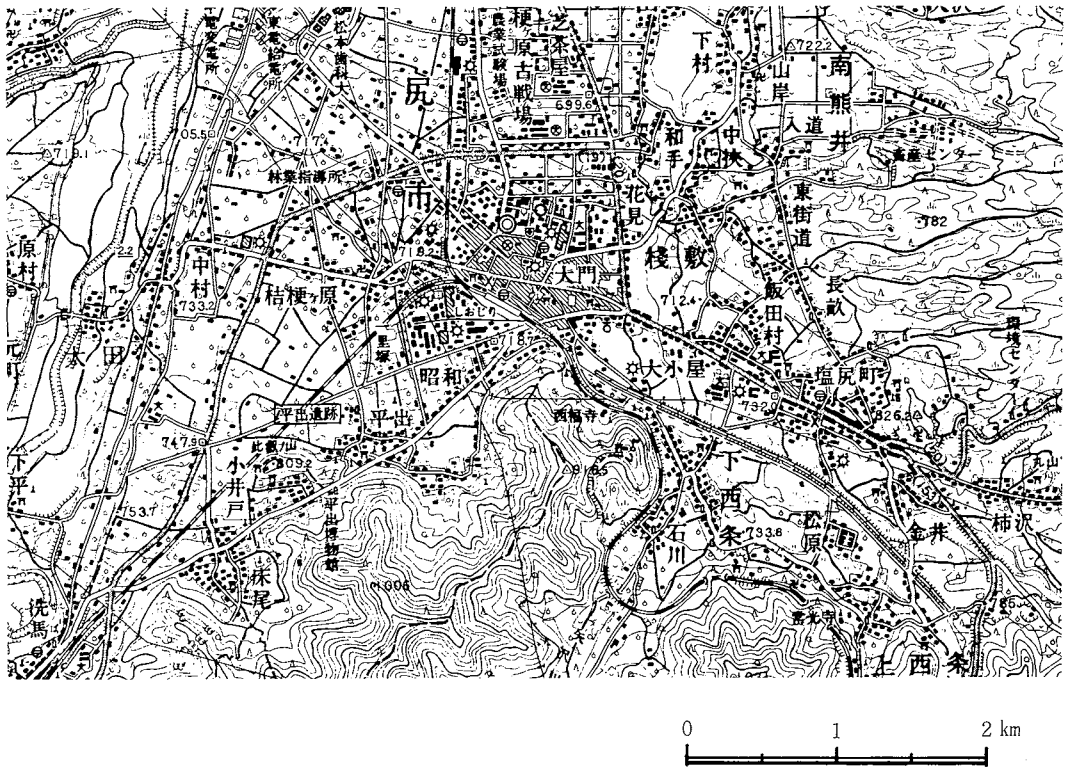
第II章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置

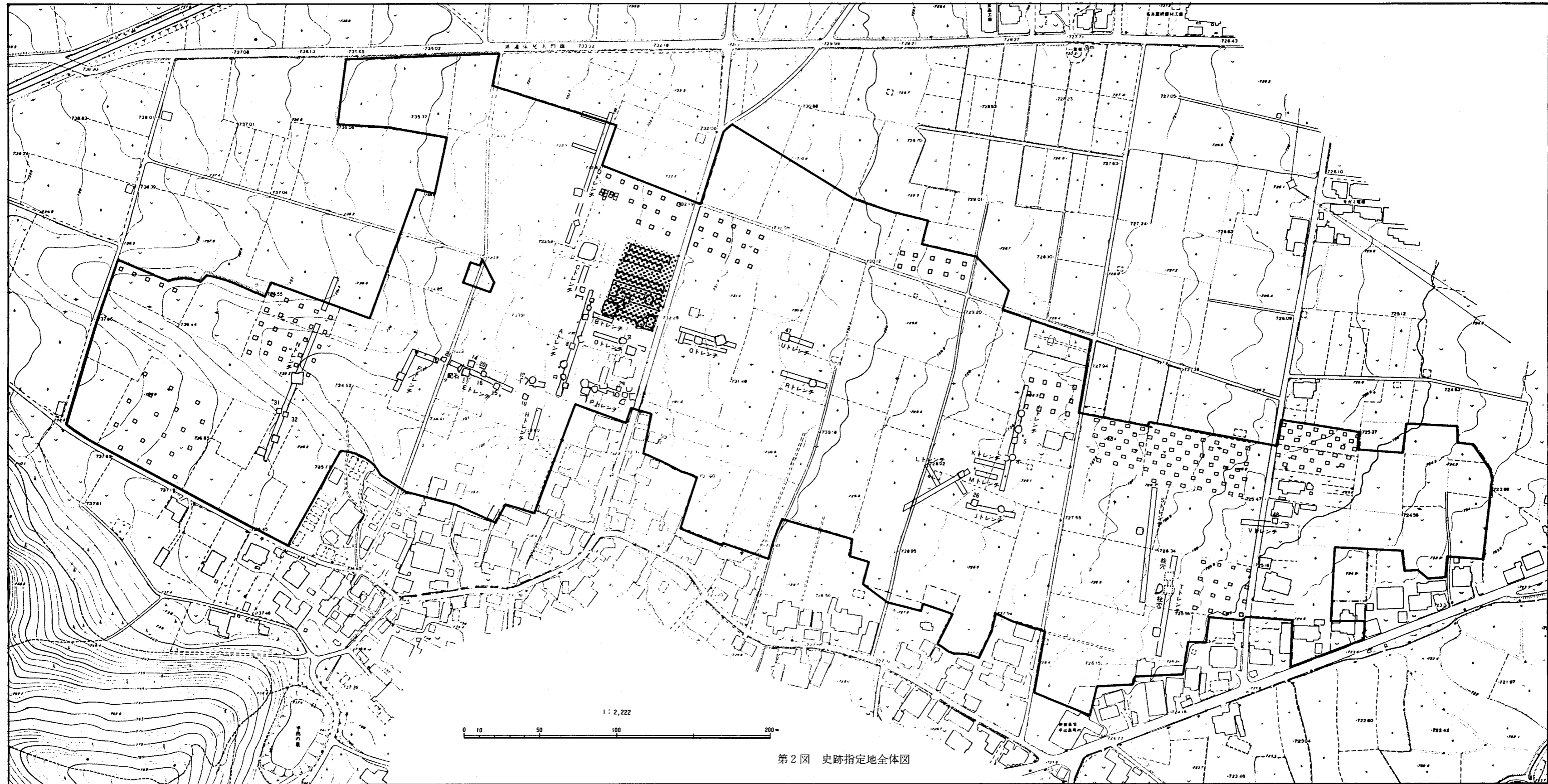
今回の調査地域は、塩尻市大字宗賀362番地および同363番地に所在する。(第1図)史跡指定地のほぼ中央に位置し、復原家屋の入口通路両側に広がる畑地である。(第2図)海拔は732.5m前後で東へ1/60の微傾斜で低下している。

平出の泉は南西方向へ320mを測り、比高差8m、また泉から流出し遺跡に沿って平出の集落の中を東流する渋川の小河川は、発掘地点に最も近づくあたりで110mを測る。

付近の地形、地質については、遺跡の北縁確認調査が行われた史跡「平出遺跡」遺構確認調査報告書—昭和55年度—(1981)P9の地質断面図が本調査域を通っているので参照されたい。



第1図 平出遺跡位置図 (1 : 50000)



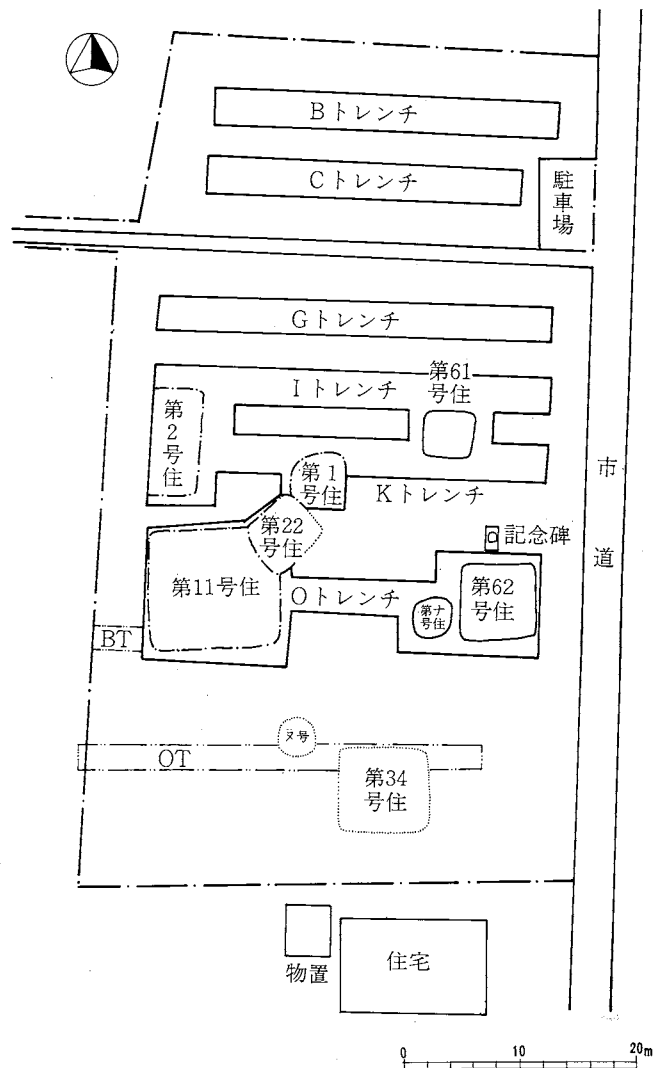
第2図 史跡指定地全体図

第2節 調査の要約

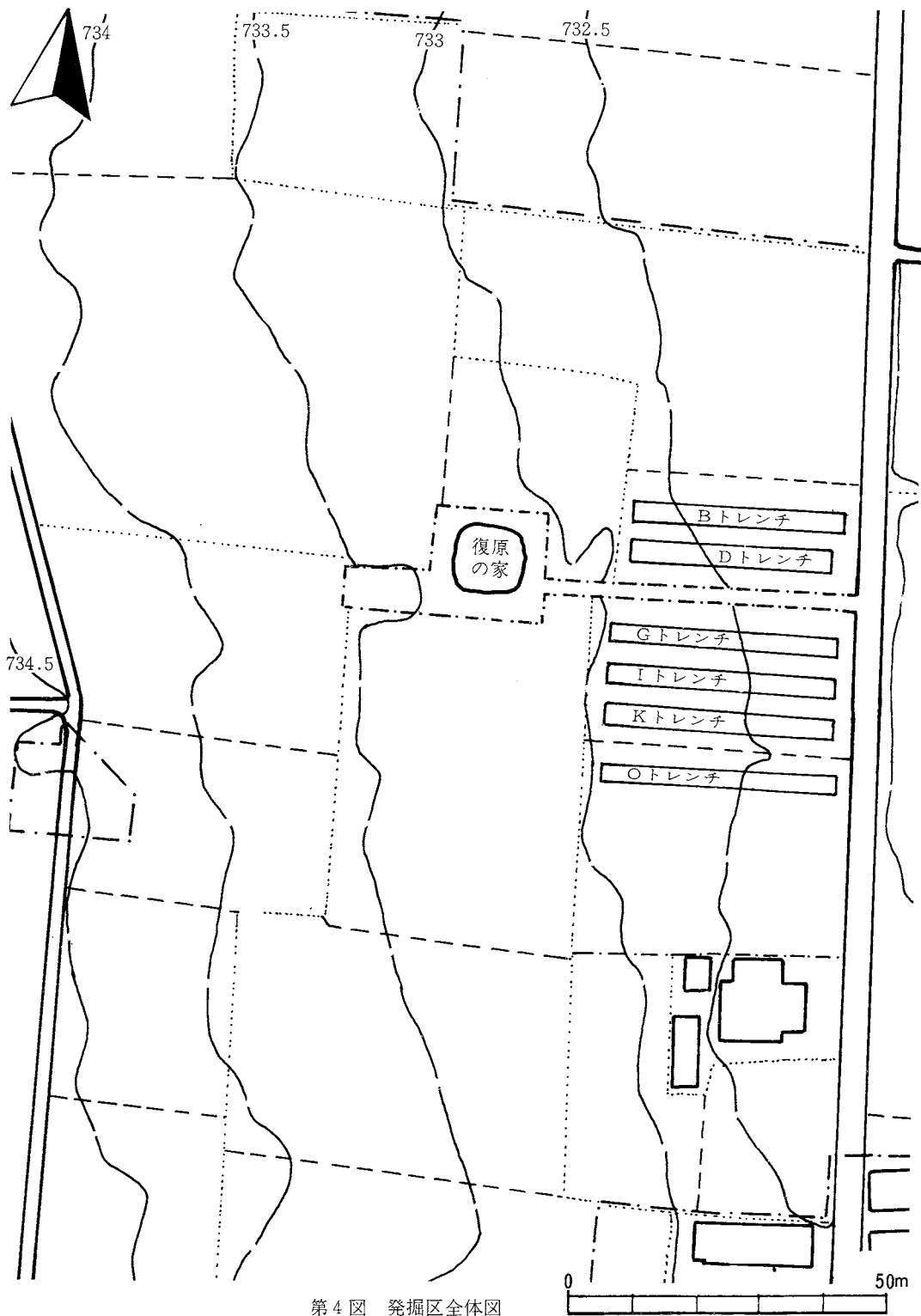
今回の調査は合計6トレンチと拡張区の発掘を行った(第4図)。その結果、北側は、Iトレンチ中央まで耕作による天地返しがされており、遺構の保存状態が極めて悪いことが確認され、遺物も僅少であった。遺構は南側のK、Oトレンチおよびその拡張区において7住居址の存在が確認された。このうち4住居址はすでに昭和20年代に検出され、今回再確認という形になったものであるが、残りの3住居址については今回新たに確認されたものである。住居址以外の遺構検出は、すべてのトレンチにおいて皆無であった。(第3図)

出土遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代～平安時代にわたっているが、出土数は概して少なかった。縄文時代については、縄文中期後半の土器片が主体であるが、他に縄文後期前半の土器片が出土している。石器は、石鏃、石皿、打製石斧、磨製石斧、凹石、砥石が出土し、他に黒曜石片が出土している。弥生時代については、弥生時代中期の条痕文系土器が約30点出土しており、これは本遺跡を含め松本平でも余り出土例のなかったものである。古墳時代～平安時代については、土師器須恵器、灰釉陶器が出土しており、他に大量の編み物用石錘の出土が目される。

(鳥羽嘉彦)



第3図 遺構配置図



第4図 発掘区全体図

第三章 遺構と遺物

第1節 今回新たに発掘された遺構と遺物

(1) 第十号住居址

遺構(第5図)Oトレンチ3、4、Pトレンチ3、4にかかり、発掘範囲の南東にローム層上より検出された住居址である。本住居址の東70cmには第62号住居址がある。東西3.43m、南北3.70mのほぼ円形を呈する。住居址の埋土は、Ⅳ層、ローム粒を含む暗褐色土層、Ⅴ層、ローム粒を含む暗黄褐色土層の2層から成り、自然の埋没を示す。壁は低く、あまり明瞭ではないが、東壁9cm、西壁13cm、南壁10cm、北壁23cmである。床面はやや堅いロームの床であり、多少の起伏はあるがほぼ平坦である。床面からはP1～P4までのピットが検出された。すべて、やや小さめの浅いピットであるが方形にならび、4本柱の主柱穴と考えられる(P1、18×18cm、深さ9cm・P2、20×14cm、深さ6cm・P3、20×18cm、深さ5cm・P4、25×20cm、深さ6cm)。炉はなく、焼土の痕跡も検出されなかったが、中央から $\frac{1}{4}$ 程度に割れた石皿の破片が出土した。本址は規模、柱穴の規模などからして、住居址とは異なった性格のものとも推測される。本址よりの出土遺物は土器片10片程と中央から出土した石皿の破片のみであった。

本住居址は出土土器片より曾利I式(平出VIb)の新しい時期と思われる。

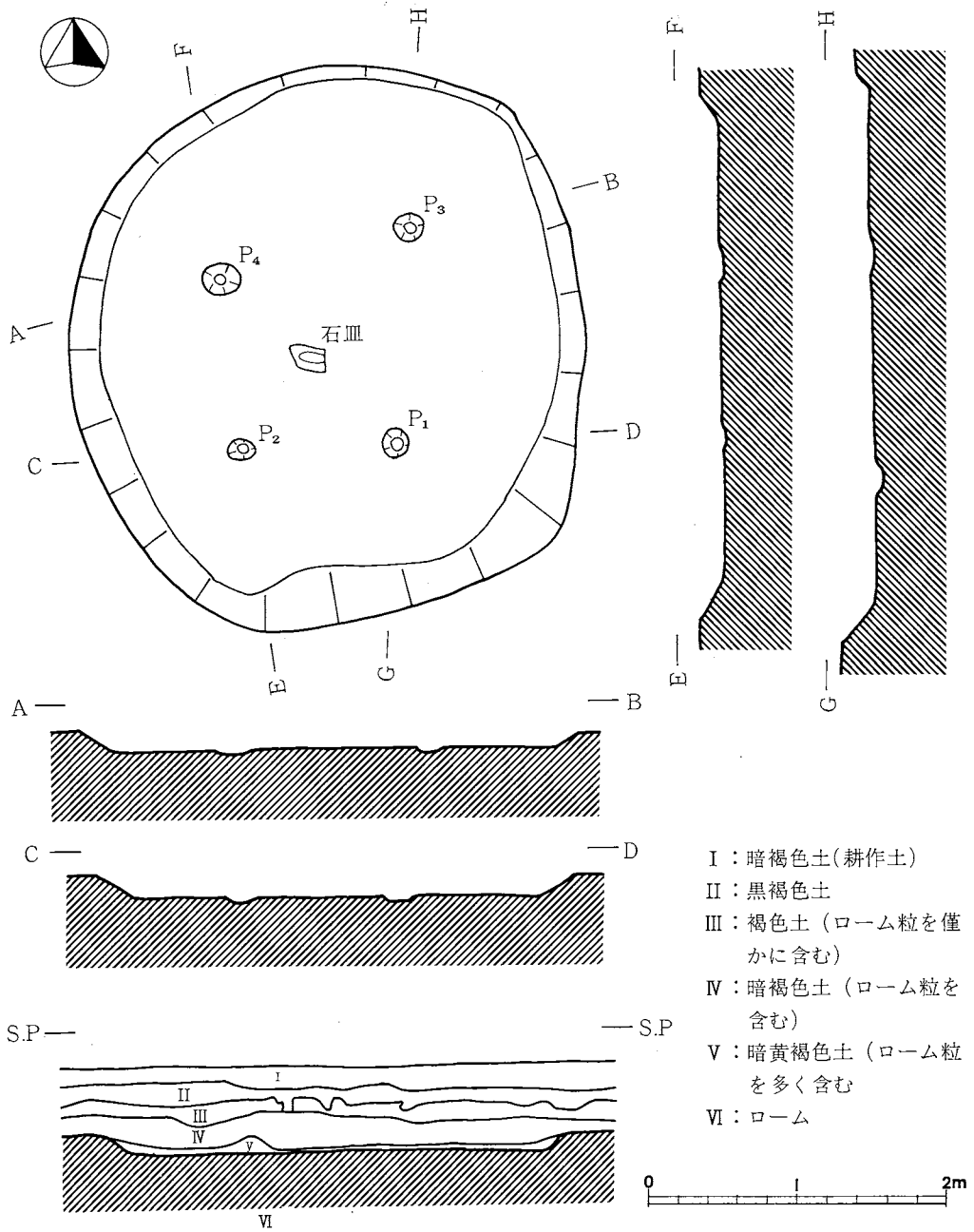
註、1981年「平出遺跡遺構確認調査報告書」塩尻市教育委員会

(島田哲男)

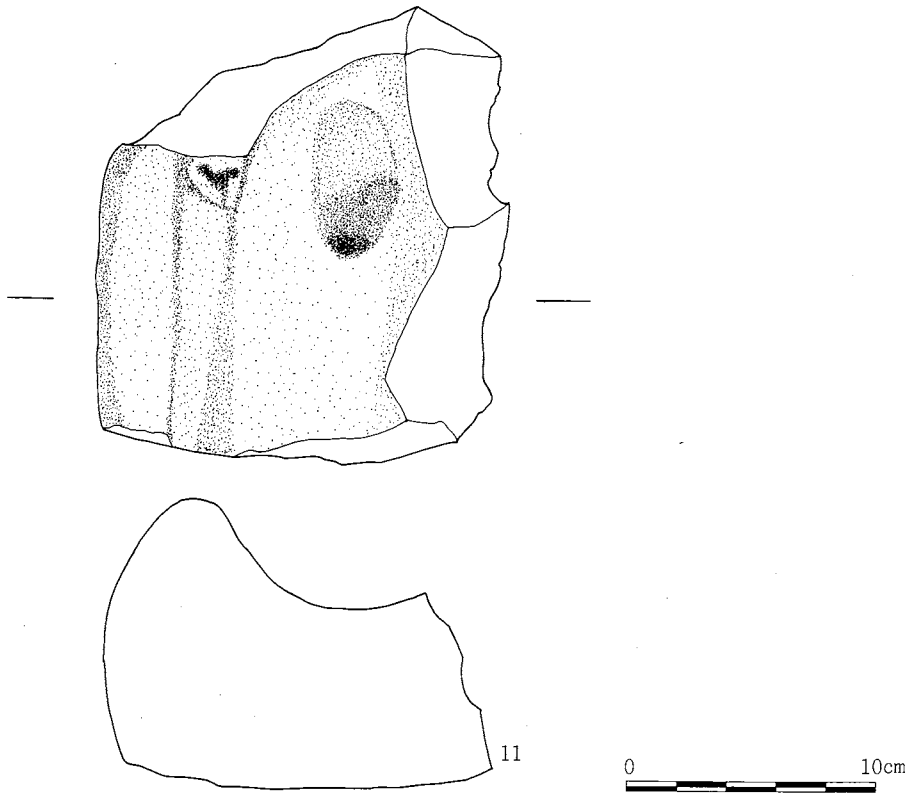
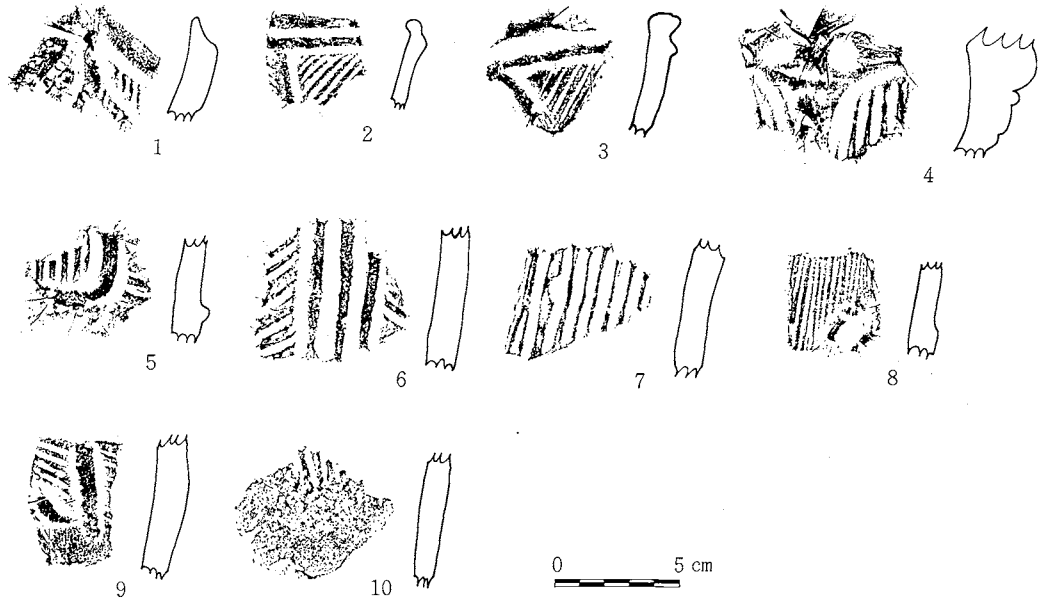
遺物(第6図)(1)石器、住居址の中心、床面上から石皿の破損品11が出土している。大きさは18.3cm×16.5cm、厚さ11.5cmの安山岩製で、多孔質のため表面はかなり荒れていたが、磨面は丁寧に磨き上げられている。本住居址出土の石器は、この石皿一点のみであった。

(2)土器 本址からは、縄文土器の破片が10点ほど出土した。これらは曾利I式に該当するものと考えられ、1～3までは口縁部、4は頸部、5～8は胴部、9、10は底部直上にあたる。1と2は同一個体、波状口縁の口縁部で、隆帯とそれと平行する連続刺突文の区画文内を沈線で充填し、特に1の方は隆帯上にキザミが施されている。3～10はいずれも沈線と隆帯により施文されたものであるが、8の隆帯上にもキザミがみれる。4は、ミミズク型把手を付した頸部にあたる。

(前田清彦)



第5図 第十号住居址

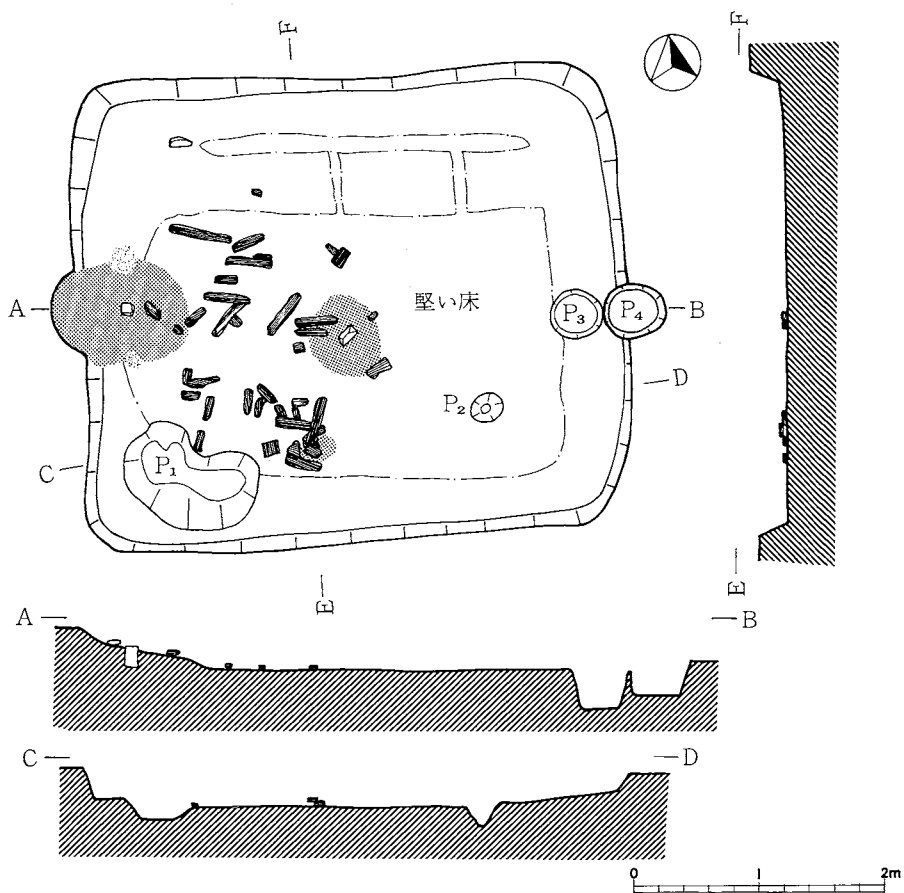


第6图 第十号住居址出土土器·石器

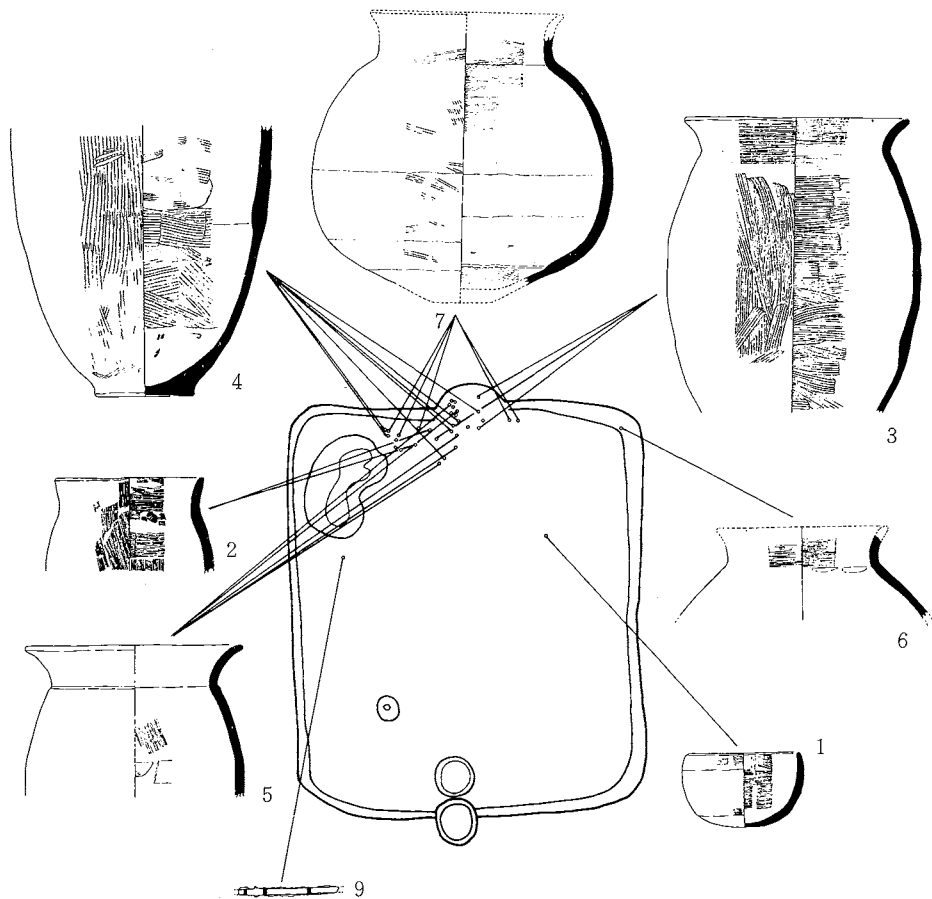
(2) 第61号住居址

調査経過 Kトレンチを掘り下げると幅50~60cm、長さ4.3mの落ち込みが確認され、Iトレンチ方向への拡がりが見込まれた。そこで、Kトレンチで確認された落ち込みを追う形で、Iトレンチへと拡張を行ない、表面検出をした。その結果、I~Kトレンチにかかる方形の単一遺構であることが確認された。さらに掘りすすめると覆土が非常に黒く、土器片と共に多量の炭化物が認められ、焼失住居ではないかと予想された。

遺構(第7図) プランは、南北3.7m、東西4.4mの隅丸方形を呈する。主軸は東西方向を指す。壁はローム層を掘り込んでおり、ほぼ垂直である。壁高は東壁20~25cm、南壁20~25cm、西壁25~31cm、北壁25~31cmとなっている。床はローム面をそのまま用いており、中央部分に2.5×3.5mの範囲で非常に堅緻な部分が見られる。しかし本址の北側3分の1は、後世の攪乱によって堅緻な床面もかなり破壊されている。また、床面は全体に北から南へなだらかに傾斜している。ピツ



第7図 第61号住居址



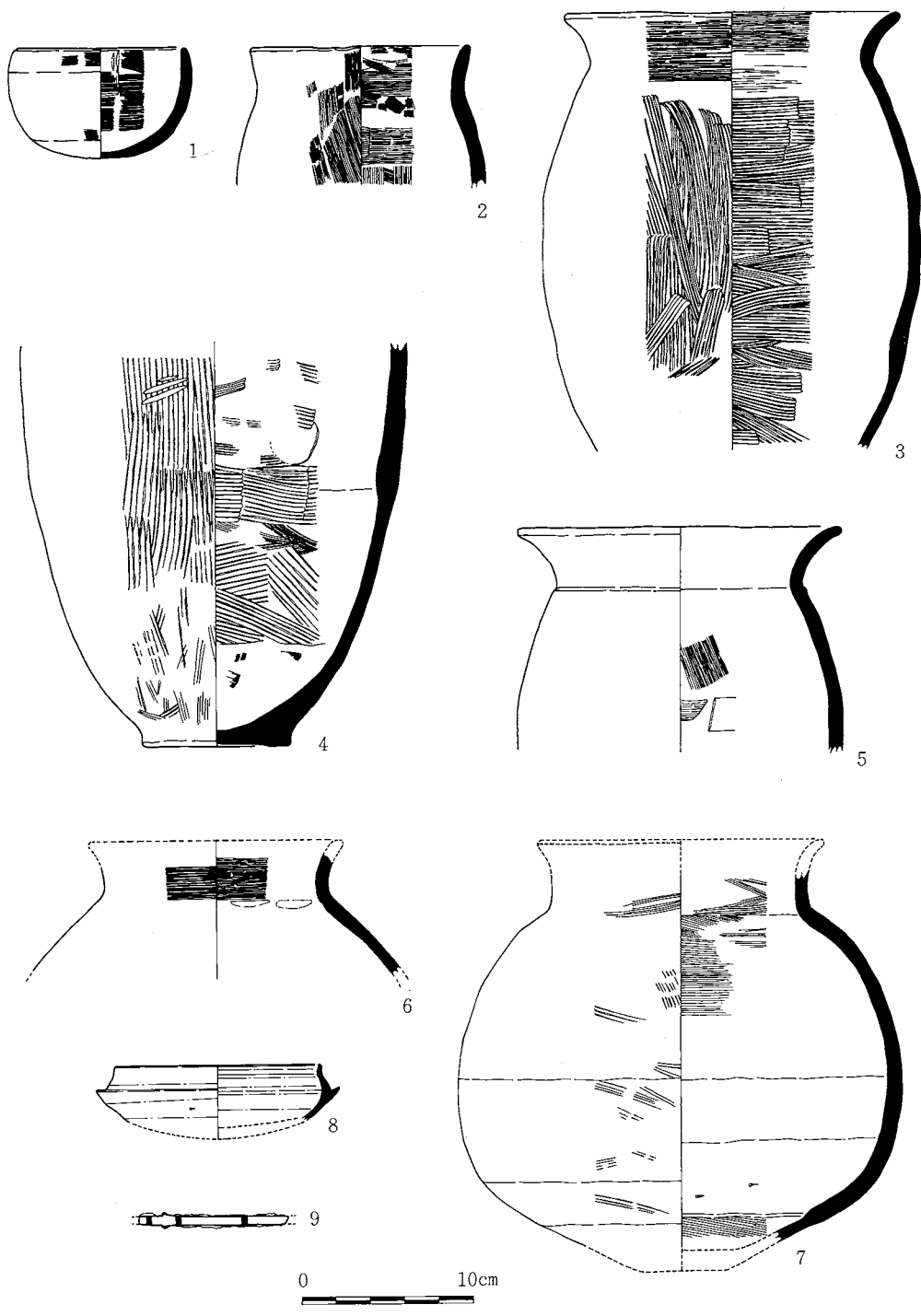
第8図 第61号住居址土器・鉄器出土状態

トは床面上にP 1～P 3 まであり、東壁中央にP 4 が確認された。P 1 (60×100cm、-15cm)、P2 (25×25cm、-20cm)は柱穴と考えられるが、P 3 (45×45cm、-20cm)、P 4 (50×50cm、-10cm)は住居廃棄後の何らかの遺構に伴う掘り込みであると考えられる。P 1、P 2 の位置関係から住居の北側にも柱穴があったものと思われる。

本址に付随する施設としては、カマドがある。カマドは粘土組みカマドで西壁中央に壁をわずかに挟り込んで設けられている。支脚石を持ち、規模は間口50cm、奥行き60cmと考えられる。カマド内には焼土が20cm前後堆積しており、完形の土器も数点出土した。

本址の特徴は、炭化材がかなり出土したことである。炭化材は住居址の西半分よりカマドを中心とする形で出土し、床面直上に存在していた。P1東側の焼土は7cmほど堆積していた。炭化材・出土遺物の状態から本址は焼失住居もしくは火災の被害を受けた住居と予想される。

出土土器の様相から本址は7世紀に属する住居址と推定される。



第9図 第61号住居址出土土器・鉄器

遺物 土器、鉄器がある。出土状態(第8図)はカマド内及びカマド周辺からである。

土器(第9図)土師器、須恵器が出土している。完形の土師器7、須恵器1の計8点と土師器片数点である。

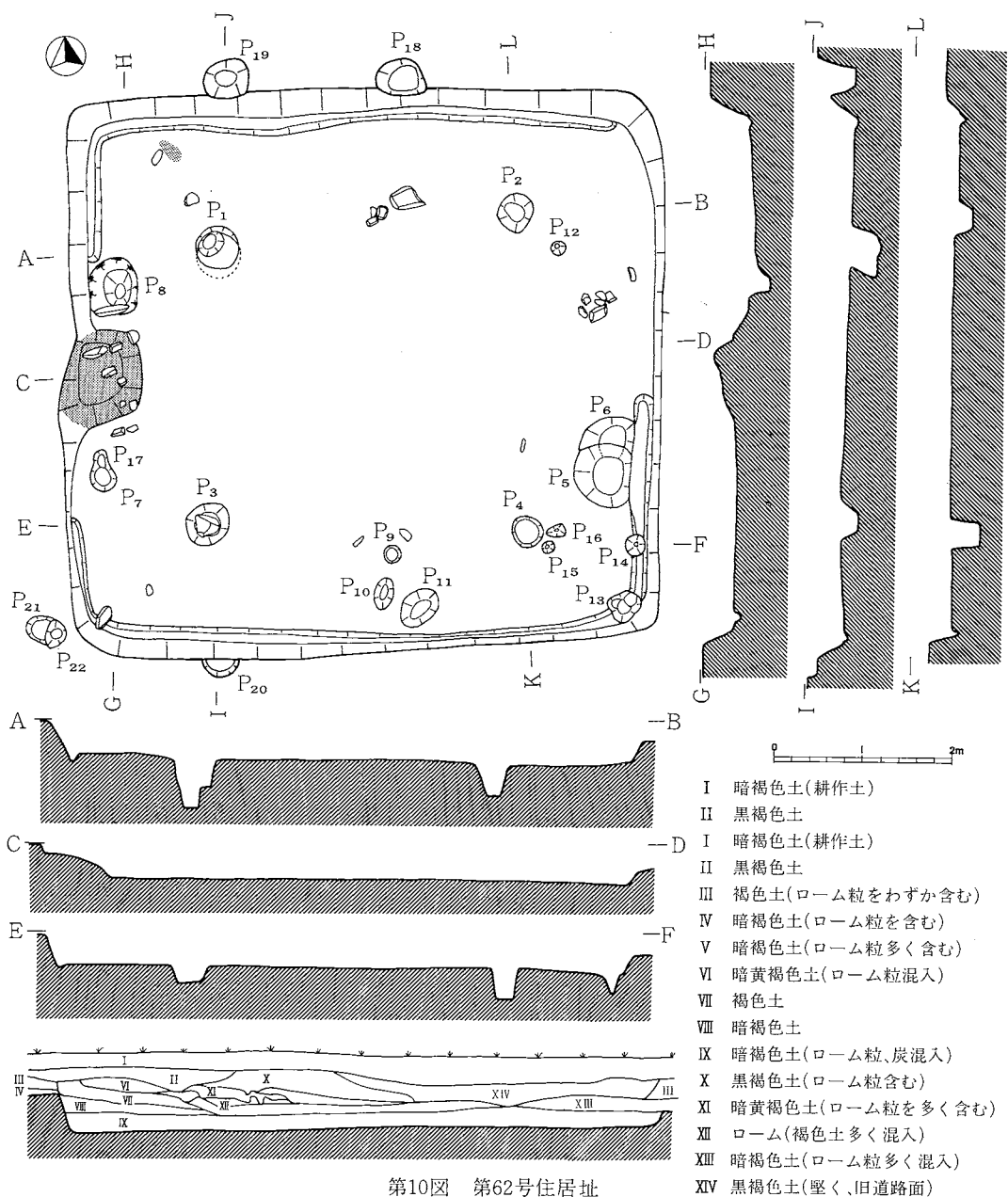
土師器には坏、小形甕、甕、がある。1は完形の坏で、色調は暗褐色一部淡明褐色である。内面はハケナデがなされ、外面は、口縁部がハケナデ、胴部がハケナデ後ヘラミガキの調整がされている。底部はヘラケズリである。2は小型甕で、色調は淡黄褐色である。内面は口縁部から胴上半部にかけてハケによる横位ナデがなされ、胴中央部に縦位ナデがみられる。外面は口縁部から胴部にかけてハケによる縦位ナデがみられる。3、4、5は甕である。3は淡褐色で、内外面とも口縁部はハケによる横位ナデ、胴部も内外面ともハケメ痕が残る。4は暗褐色で、内面は横と斜めのハケメである。外面は縦のハケメである。5は赤褐色で3、4より口縁部が外反している。内面はハケナデであり、外面は口縁部がハケナデ、胴部はヘラケズリのあとヘラナデがなされている。6、7は3～5とは形態が違う甕である。6は暗黄褐色で、口縁部は内外面ともハケナデ、胴部は内外面ともヘラミガキである。7は暗褐色で、内面はハケメ、ヘラケズリの後ヘラミガキがなされ、胴下半部にはハケメがある。外面はハケメの後ヘラミガキで調整されている。8は須恵器の蓋付坏で色調は青灰色である。内面は時計回りのロクロナデ、外面は回転ヘラケズリである。

鉄器(第9図9)、1点出土している。錆びが激しく形状がわかる程度であり、長さ5.4cm・厚さ0.32cmの棒状を呈する。(小嶋秀典)

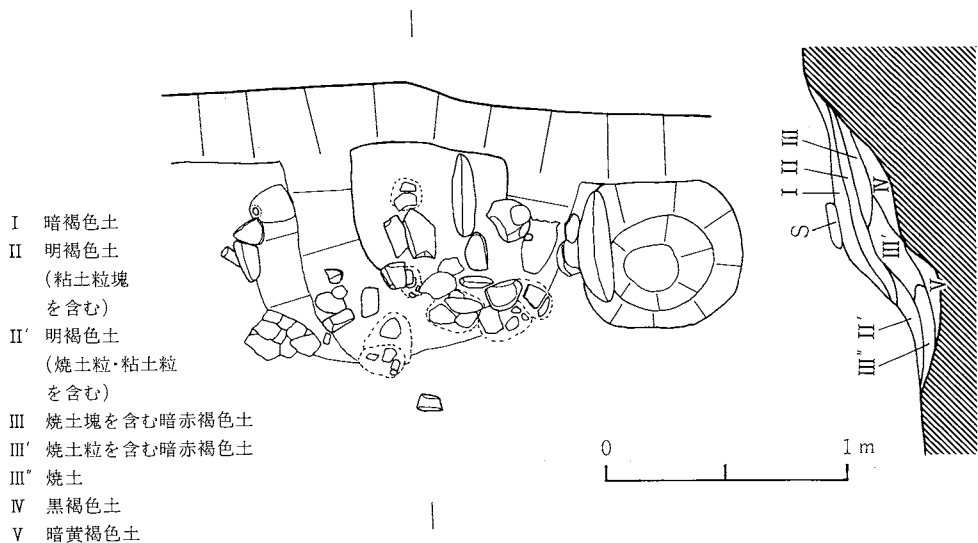
3) 第62号住居址

調査経過 Oトレンチ1、2、3を中心とし、K、Pトレンチ、1、2、3に懸り、発掘範囲の南東端に褐色土層から検出された住居址である。

遺構(第10、11図)東西6.9m、南北6.46mの隅丸方形の平面形をもち、主軸方向はN89°Wを指す。本址は褐色土より掘り込んでおり、埋土は4層から成り、7層が褐色土、8層が暗褐色土、9層がローム粒、炭粒を含む暗褐色土、13層がローム粒を多く含む暗褐色土で、自然埋没である。東側は旧道があった部分で、10層の堅い黒褐色土が13層上面まで及んでいる。壁は褐色土からローム層まで掘り込み西、南、北壁は遺存状態が良好であるが東壁は旧道のためか攪乱を受けており低い。壁高は、東壁20cm、西壁56cm、南壁35cm、北壁5cmではほぼ垂直に立ち上っている。壁上面は地山の傾斜で、西～東へ傾斜している。壁際にはカマド周辺、東壁北半分を除き、幅10～25cm、深さ2～10cmの周溝が回る。床面はローム層で多少の凹凸はあるが、堅くたたきしめられており、ほぼ平坦であるが西～東へ5cm程度、1°の傾斜をもつ。床面からはP1～P15のピットが検出された。支柱穴は、P1(50×50cm、深さ57cm)、P2(40×40、深さ47cm)、P3(52×45cm、深さ20cm)、P4(38×35cm、深さ37cm)が方形に並び4本柱と考えられる。P1は2段になっており、1段目は南側が袋状となり、2段目は1段目の底の北西にやや傾斜し掘られている。P2

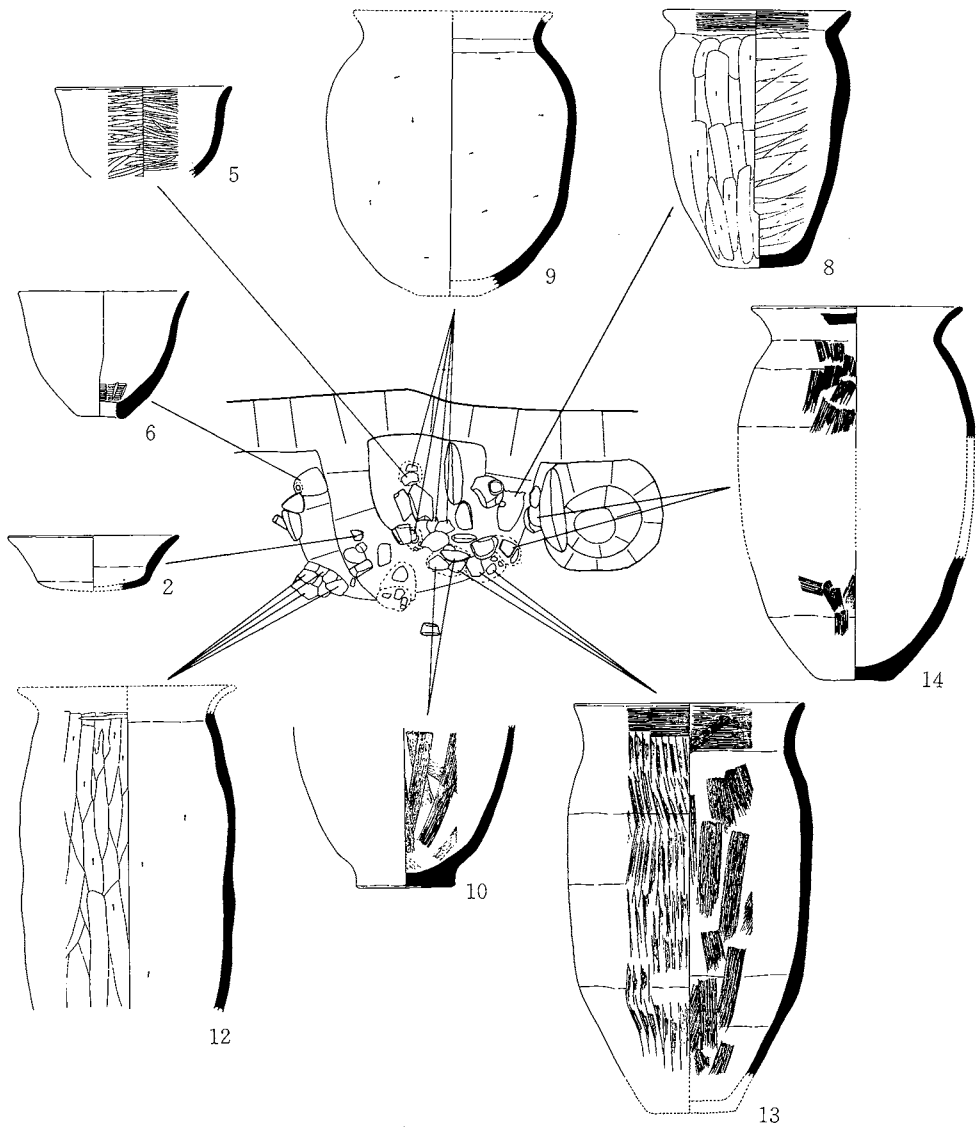


は垂直よりやや傾斜をもって掘られている。P 3は垂直よりやや傾斜をもって掘られ、やや他のものにくらべて浅く、中に三角柱形の高さ15cmの石が入っている。P 4はほぼ垂直に掘られている。床面南東側のP 5 (70×66cm、深さ48cm)、P 6 (残存部径61cm、深さ38cm)、カマド北側のP 8 (65×54cm、深さ37cm)は貯蔵穴と位置、大きさから推定される。P5はP6を切って掘られている。床面の他のピットは何のためか断定しがたいが、これらの中には、支柱穴となるものもあ



第11図 第62号住居址カマド

と思われる (P 7、28×28cm、深さ11cm・P 9、20×18cm、深さ10cm・P 10、36×22cm、深さ14cm・P 11、52×38cm、深さ15cm・P 12、18×18cm、深さ10cm・P 13、36×34cm、深さ16cm・P 14、25×22cm、深さ19cm・P 15、16×16cm、深さ7cm・P 16、22×16cm、深さ13cm・P 17、22×16cm、深さ7cm)。壁外には、P 18 (52×44cm、深さ42cm)、P 19 (54×43cm、深さ28cm) が北壁に接してP 20 (残存部径40cm、深さ14cm) が南壁に接して、P 21 (残存部径34cm、深さ12cm)、P 22 (36×20cm、深さ28cm) が南西コーナーより24cm離れて検出された。P 18、19などは柱穴状である。P 18~20は壁に接していたが住居址との切り合い関係はつかめなかった。これらのピットは断定し難いが、上層を造るうえで本址に付随した柱穴及びピットとも推定される。北西コーナー近くの床面には22×14cm、厚さ3cmの範囲で焼土が検出された。また、扁平な石1ヶと拳大の礫3ヶが床面の北側P1とP2の間に、拳大の礫が7ヶ、床面の東側やや北寄りに集中して検出された。カマドは西壁中央に石組粘土カマドが構築されている。110×110cmの規模でカマド上及び周辺には石が散乱している。天井石はP 8の南側に崩れ落ちたものが1ヶ残る。袖石は、右側に扁平な円形の石と柱状の石が2ヶ、左側に柱状の石が2ヶ立てられ遺存している。粘土は袖石の周辺に残存しているがほとんどは粘土塊、粒となり飛び散っていた。おそらく本址のカマドは粘土に明褐色土、暗褐色土を混入させて構築したものとも推定される。焚口部は10cm掘り凹められていた。煙道は検出されなかった。焚口部には焼き土が5cm堆積しカマド内にも焼土塊、粒混りの完全な焼き土になり切らなかつたと思われる暗赤褐色土が検出された。本址のカマドはカマド内周辺の袖石、天井石を除くとカマド内及び周辺に散る石はさほど大きなものはないので、天井石



第12図 第62号住居址土器出土状態

袖石が住居廃絶時に抜き取られたとも考えられるが、粘土を主流に石を使用して構築したとも推定される。

本址の遺物出土状態はカマド内及び周辺に集中した(第12図)。また、小形甕の完形品が東壁際中央床面に出土した。カマド内及び周辺では、甕、椀、坏の大破片が散乱して出土したが、カマド右側に甕の完形品と甕胴下半分の完形品、左側に甕の完形品が出土した。またカマドの右側か

ら扁平な砥石が出土した。

本址は古墳時代後半、7世紀前半前後と思われる。

(島田哲男)

遺物 (第13、14図) カマドを中心にして出土し、石器はカマド北側、完形の甕8の隣に21.2×16.2cm、厚さ4.9cmの平らな砥石が出土している。土器はいずれも土師器で、甕7、小形甕1、甑1、坏3、有稜坏2、が出土している。

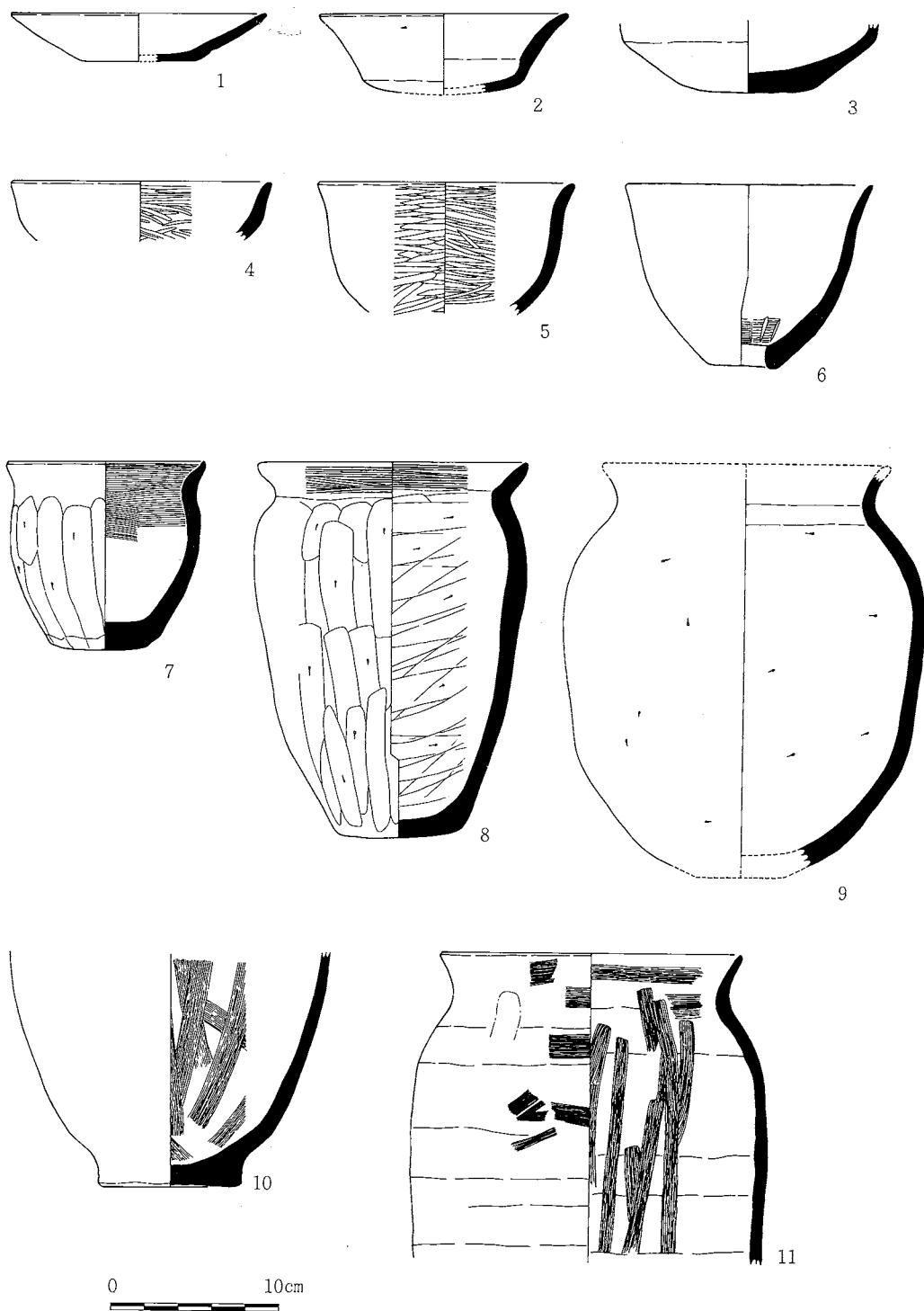
甕については8が完形品で、他の甕と比べると幾分小形ではあるが器厚は0.9mm～1.3mmとかなり厚い。色調は内外面とも赤褐色で、胴部はヘラケズリ、口縁部はハケ目で仕上げられている。また、口縁部には炭化物が黒く付着していた。9は他の甕と比べるとかなり胴部の張った形を示し、色調は明褐色、整形はヘラミガキである。この甕の破片はカマドの中心付近から出土し、器面に所々黒い炭化物の付着がみられ、加熱のためか器面はかなり荒れている。10はカマド東側に出土した甕で、内外面とも暗褐色をなし、整形については内面が縦位のハケナデ外面がヘラナデで仕上げられているが、下半部を残すのみであった。11は茶褐色の甕で内面は横位のハケナデ、外面は縦位のハケナデ、そして口縁部外面は横位のハケナデで仕上げられている。この甕には輪積み痕がかなりみられ雑な成形をしており、口縁部の器厚が先へいくほど薄くなり、口縁先端に面取りがしてあるのが特徴である。12は内面茶褐色、外面赤褐色で整形は内面がハケナデの後にヘラケズリを行ってあり、外面が縦位のヘラケズリで仕上げられている。この甕は口縁部と底部を欠いている。カマド南東側に横たわって出土した13の甕は内外面とも明褐色をなし、内面が縦位のハケナデ、口縁部が横位のハケナデ、外面がハケ目で仕上げられており、カマド北東側から出土した。14は燈褐色の甕で、外面縦位のハケナデ、口縁部が横位のハケナデで仕上げられているが内面については器面が荒れているため整形は不明瞭であった。

この他、カマド内からは、甑6と坏5と有稜坏2が出土している。甑6は内外面とも淡赤褐で、口縁部がハケナデ、胴部外面がヘラケズリのあとヘラナデ(一部ヘラミガキ)、内面がヘラミガキとヘラナデ、内面下部が板状工具によるケズリで仕上げられている。この甑はカマド南側に横たわるようにして完形で出土した。坏5は内面が黒色処理されており、ミガキの暗文がある。有稜坏2はカマド南東側から出土しており、器面は黒褐色、ヘラナデとハケナデの整形で、小石混じりの荒い作りである。

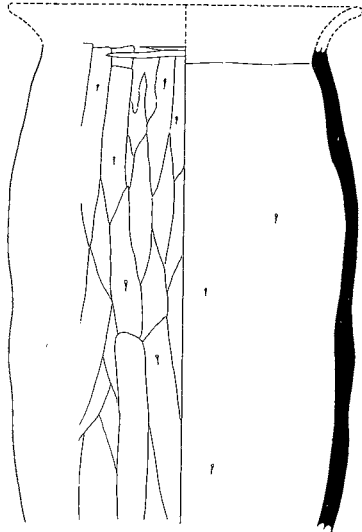
また東壁中央からは小型甕7が出土している。色調は明褐色、外面はヘラケズリ、内面はハケナデの整形である。この小型甕の特徴として、底部が1.7cmと厚いことが挙げられよう。

これらの他に実測可能なものとして、坏3点1・3、4が出土している。

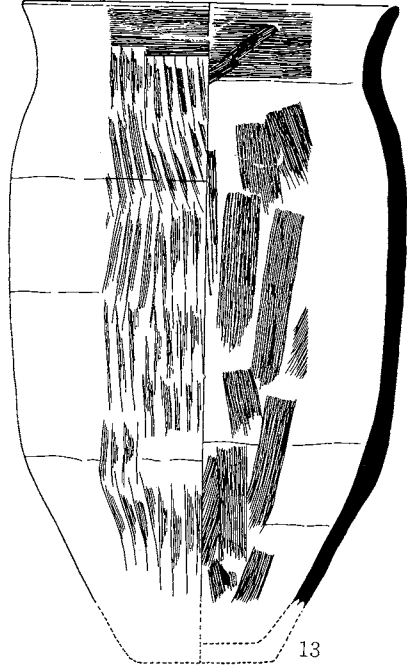
(前田清彦)



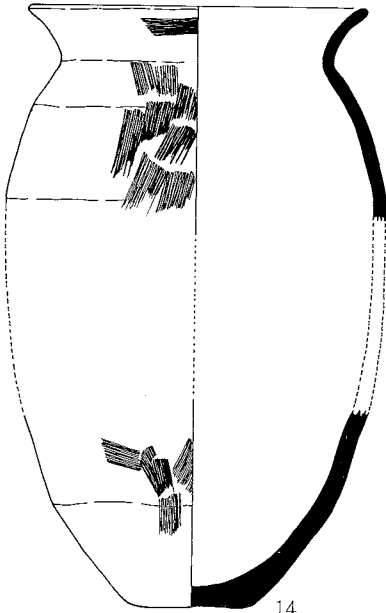
第13图 第62号住居址出土土器



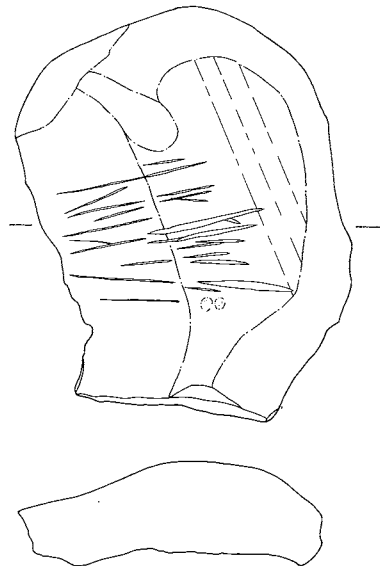
12



13



14



15

0 10cm

第14图 第62号住居址出土土器・石器

第2節 既発掘の遺構と遺物

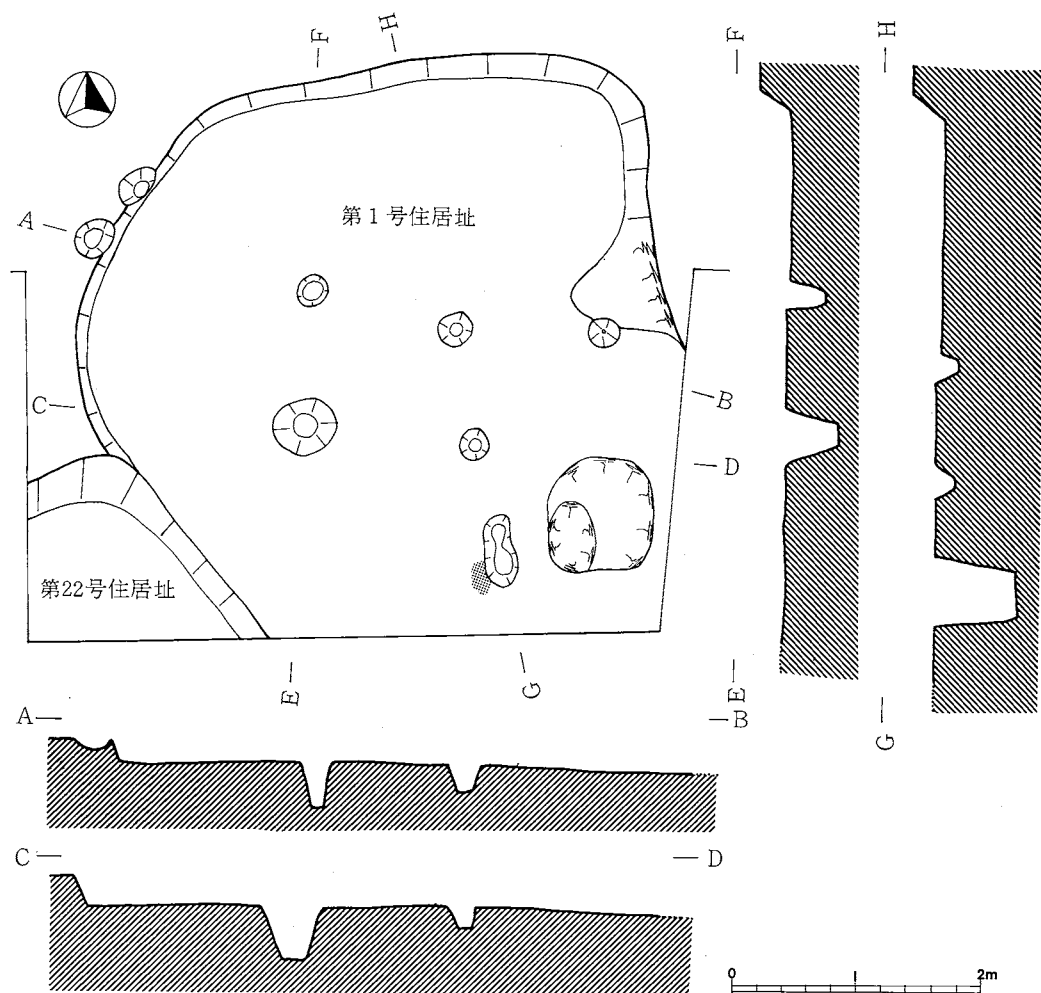
(1) 第1号住居址

本址は昭和24年11月に発掘調査（予備調査）が行なわれており報告書には次のように記されている。「前記調査の際、後のBトレンチ第11号址の北方に発見されたもので、南方壁が確認されなかったため、そのプランは明らかでないが、大体方形の堅穴と推定される。周溝なく、柱穴3箇、凹穴1箇、床面は地表下70cm、東方壁に石組のカマドが設けられ、これを中心に広く焼土の散布が見られた。またカマドの右側に沿って円形の敷石があり、大部分はよく焼けていた。出土遺物は土師器高坏片1、須恵器盃片1、灰釉陶器皿4をはじめ、釘様鉄製品1箇であった。これ等の点から見ると本址は土師式後期の堅穴に属する事が推察出来る。」今回の調査で、本址は位置的にはほぼ報告書のとおりであるが、第22号住居址と重複関係にある事が明らかになった。(第15図) 第1号住居址と第22号住居址とは同時に調査されていないため、重複関係にある事が判明しなかったものと思われる。プランについては隅丸方形で、南壁部を第22号住居により切られている。柱穴は径が25cm内外、深さ15cm～22cmのものが3箇、径が50cm、深さ45cmのものが1箇確認された。床面は、やや堅いロームで、検出面からの深さは、30cmであった。東方壁の石組のカマド、円形の敷石については、敷石のあったと思われる所からわずかに焼土が検出された以外は、昭和24年の発掘調査で取り上げられているため確認はできなかった。本址の時期は、灰釉陶器の出土がみられることから、おそらく平安時代に属するものと考えられる。

(中野実佐雄)

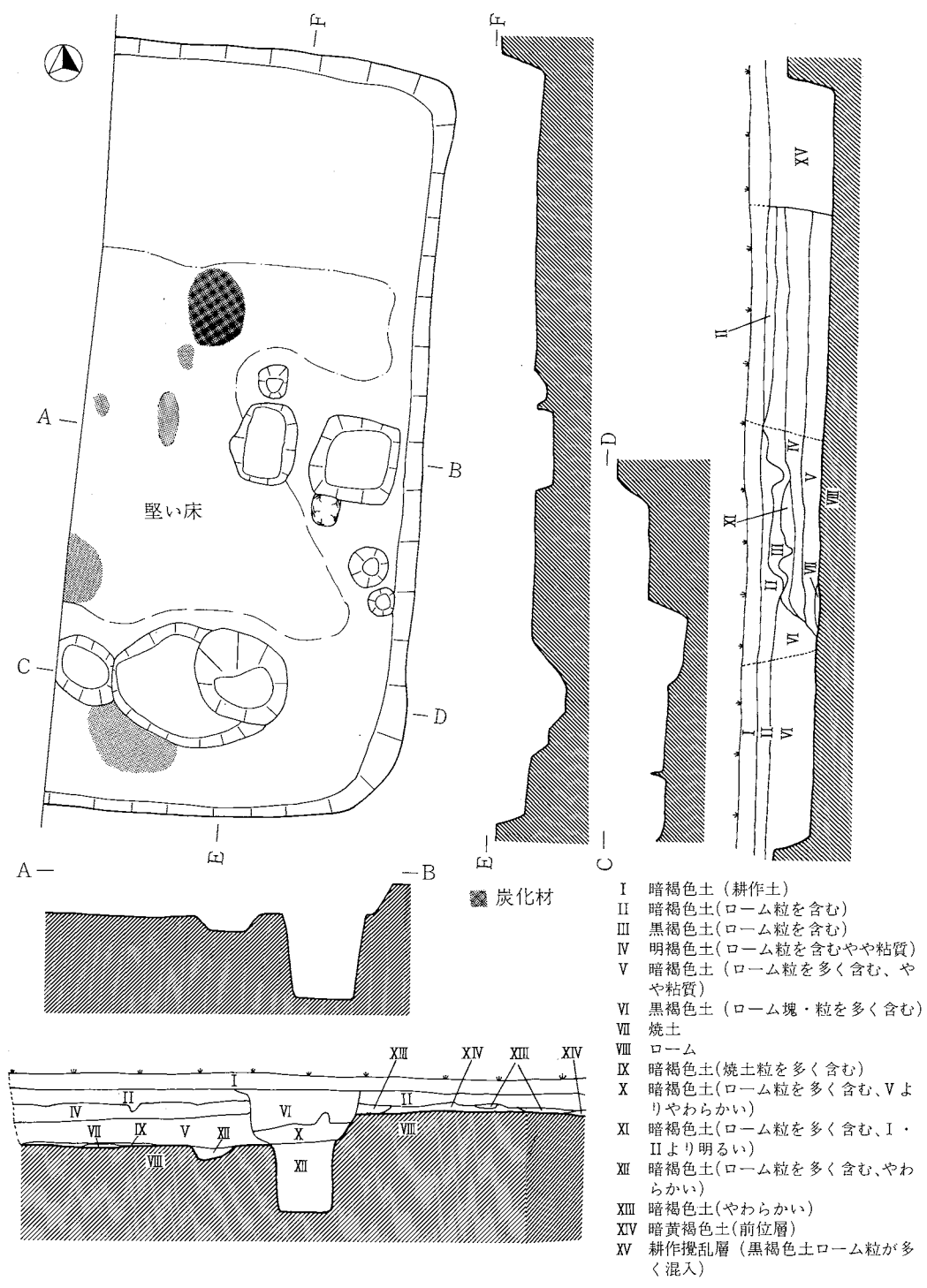
(2) 第2号住居址

遺構 昭和24年の前期調査時に南壁、東壁の1部が確認された住居址であるが、実測図もなく、記録は雑誌「信濃」第三巻一号（昭和25年）に記述された、概報の住居址配置の略図と本住居址の記述と、昭和30年の報告書「平出」の記述であった。「平出」の記述でも、「第1号址の西方で、同一トレンチ内に発見されたものである。東と南の両壁は確認されたが、北と西の壁は不明であった。」とされた住居址であったが今回の再発掘により、住居址の東半分ではあるが全貌が確認の掘り込みが検出された。約 $\frac{1}{2}$ を検出したのみで全体形ははっきりとしないが、南北9.4m、東西もので $\frac{2}{3}$ は未発掘であった。本址はI、J、K、Lトレンチ10、11、発掘範囲の西側よりローム層に掘り込み検出された。約 $\frac{1}{2}$ を検出したのみで全体形ははっきりとしないが、南北9.4m、東西もほぼそれと同じ程度の隅丸方形の大形住居と推定される。住居址埋土は、3層—ローム粒を含む黒褐色土、4層—ローム粒を含む明褐色土、5層—やや粘性のローム粒を多く含む暗褐色土、7層—焼土、9層—焼土粒を多く含む暗褐色土の5層から成り、7、9層の床面上の2層を除くと

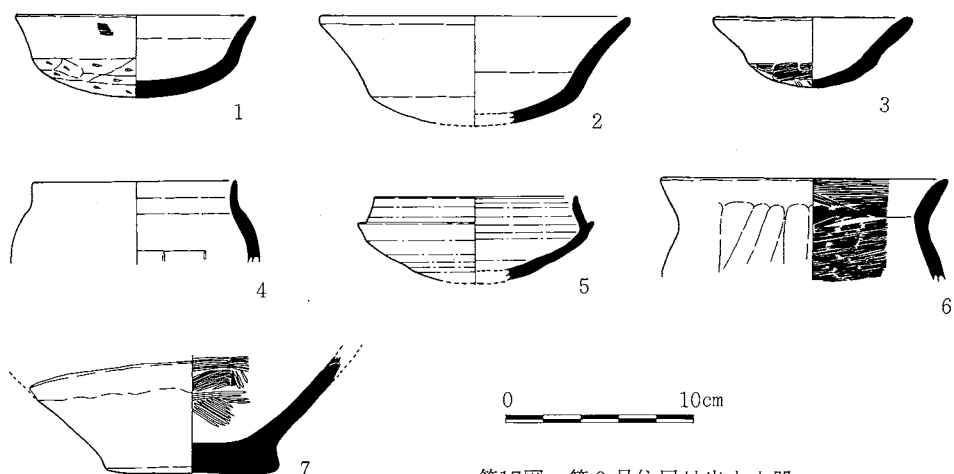


第15図 第1・22号住居址

自然の埋没を示す。住居址南側2.2m、東側1.4mは前記調査の際に掘られ埋めもどされた部分でまた北側2mは耕作による攪乱を受けていた。壁はしっかりとローム層に掘り込み、高く、良好で、壁高は東壁49cm、南壁33cm、北壁50cmでほぼ垂直に立ち上っている。床面は多少の起伏はあるが、堅くたたきしめられており、平坦で良好であるが北側2mは耕作の攪乱が及んでおり、軟弱になっていた。床面からはP1～P9のピットが検出された。そのうちP1、P9は報告書記述中にある「柱穴四箇と大形凹穴一箇」の一部、P2は検出時には浅かった（精査の結果深くなった）ので概報の記述中にある「長方形の小凹所」（「平出」では「長方形小凹穴」）である。P3、6、7は昭和24年発掘時に掘った部分であったが、当時は検出できなかったらしく、床面精査時に検出された。P3（114×110cm、深さ50cm）は位置からして支柱穴の一部と思われる。P5（40×34cm、深さ13cm）、P6（50×46cm、深さ17cm）、P7（36×13cm、深さ10cm）は位置、規模から



第16図 第2号住居址



第17図 第2号住居址出土土器

して支柱穴の一部と考えられる。P 1 (98×68cm、深さ21cm)、P 8 (100×100cm、深さ101cm)は位置などから柱穴とも貯蔵穴とも考えられる。P 2 (200×146cm、深さ20cm)、P 4 (100×72cm、深さ21cm)は貯蔵穴と考えられる。P 2からは昭和24年発掘時に鉄鑿が出土している。床面上には焼土が所々に見られ、厚い所で10cm測る。また、炭化材も住居址中央やや北寄りに見られた。昭和24年の前期調査でも本址より、焼土、炭化材、炭化物が検出されており、「火災に遭ったとも考えられた。」とされたごとく、おそらく、一種の焼失住居と推定される。カマドは発掘範囲外にあるらしく検出されなかった。

本址よりの今回の遺物出土状態は、集中する部分は見られなかったが、P 5の上部より、甕の底の完形品、P 5の東側に有稜環の半完形品が、本址中央部から須恵器の蓋付坏の破片が出土した。本址の時期は古墳時代後半、7世紀前半と考えられる。

遺物(第17図) 本址からの遺物はさほど多くなかった。1～3は土師器有稜環である。1は内面黒色処理された黒色土器で、口縁部板状工具(ハケ)でなでられ、底部がへらケズリされ、その後、内外面へらミガキしている。2は、内外面明褐色でへらミガキされている。3は手づくね土器的である。内外面、淡赤褐色で、外面、口縁部を板状工具(ハケ)でナデ、稜下半～底部を同工具よりケズリ(薄いハケ目が残る)をおこない、内面をへらミガキしている。4は、土師器の小形壺で、内面黒色処理された黒色土器で、外面は赤褐色である。内外面へらミガキしている。5は、須恵器の蓋付坏である。内面、外面口縁部～胴上半部をロクロナデし、外面胴下半部を回転へらケズリしている。ロクロの回転方向は逆時計回りである。6は土師器甕の口縁部～胴上半部7は土師器甕の底部である。6は内外面にハケ整形している。7は外面はへらナデ、内目はハケ整形されており、成形の積み上げ痕が良好に観察される。この住居址からは昭和24年の発掘の際に鉄ノミと砥石1ヶ、土師器壺1個体が出土しているが、鉄ノミ以外は詳細が不明である。鉄ノミは、全長20.5cm、身の部分18.5cm、身の断面短形で幅1.5cm、厚さ1.2cmで先端は片刃である。

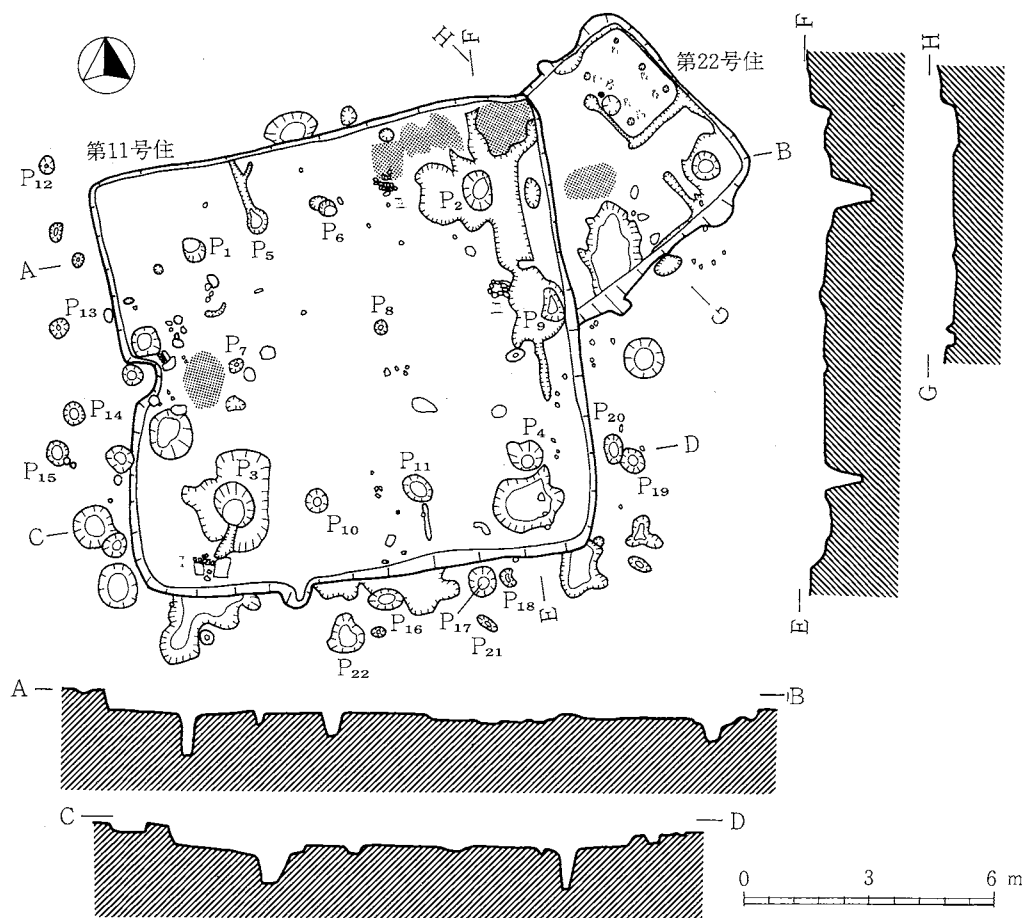
本址の遺物は、5の須恵器の年代などから古墳時代後半、7世紀前半と考えられる。(島田哲男)

(3) 第11号・22号住居址

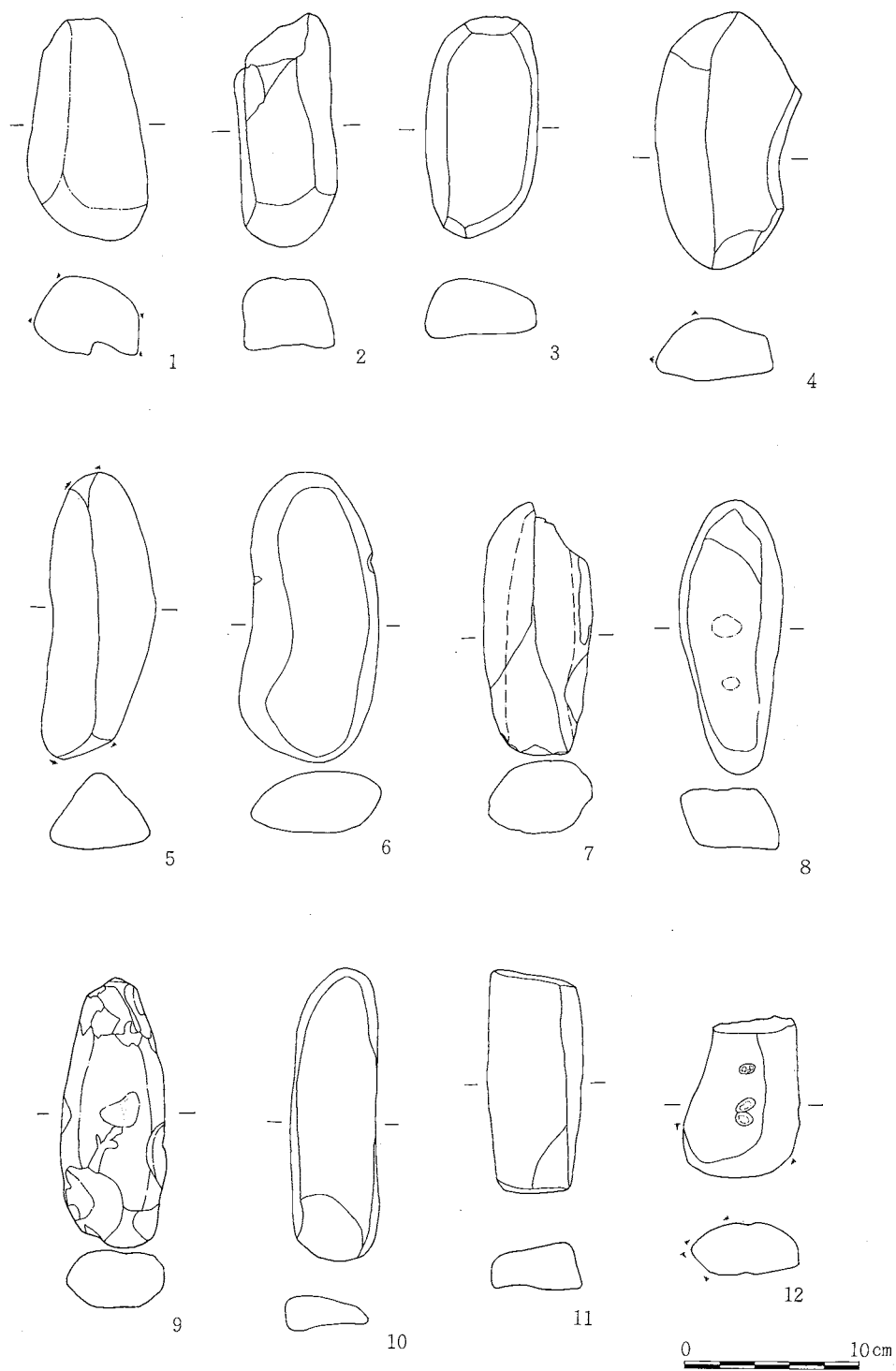
第11号、22号住居址の再調査を実施したが、昭和25年、26年の調査結果に付け加える点は、(1)第22号住居址は第1号住居址の南半部分と重複していることが判明した(第18図)(2)第11号住居址床面上に残されていた小礫が最近注目されている編み物用石錘であろうと考えられた。この2点である。

編み物用石錘

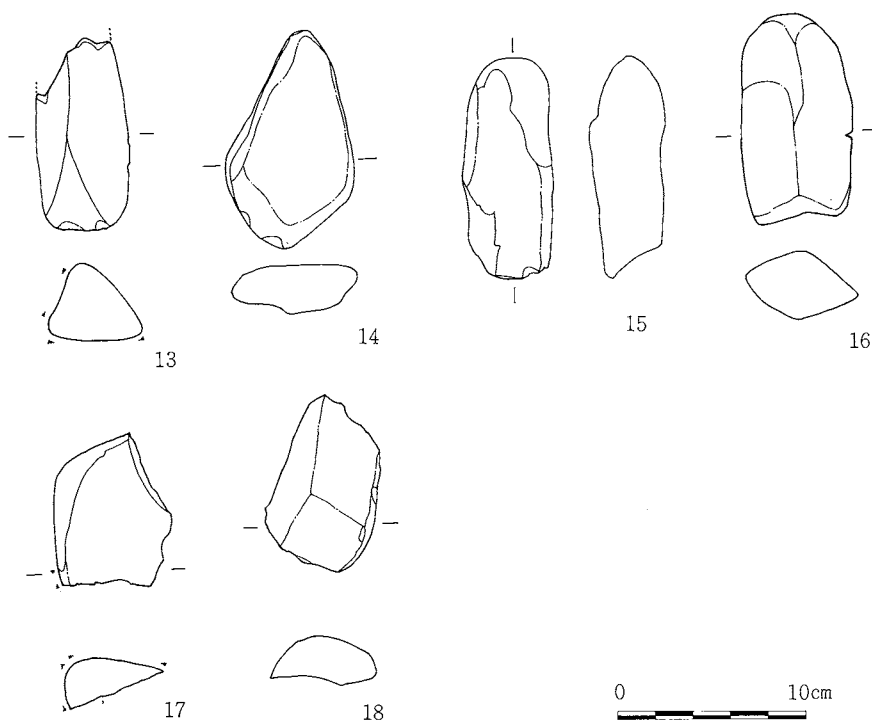
出土状態 第11号住居址の床面に密着した状態で、3ヶ所から検出された。すなわち、P₃の南南壁下から出土した18個(編み物用石錘Ⅰ第19・20図)P₂の西側、北壁寄りから出土した11個(Ⅱ・第21図)そしてP₉の西側から出土した5個(Ⅲ・第22図)の3ヶ所であり、総数34個である。(第1表)こうした3ヶ所からの出土状態は、昭和25、26年当時の発掘調査平面図にも記述されており、



第18図 第11・22号住居址



第19図 第11号住居址出土編み物用石錘 I の(1)



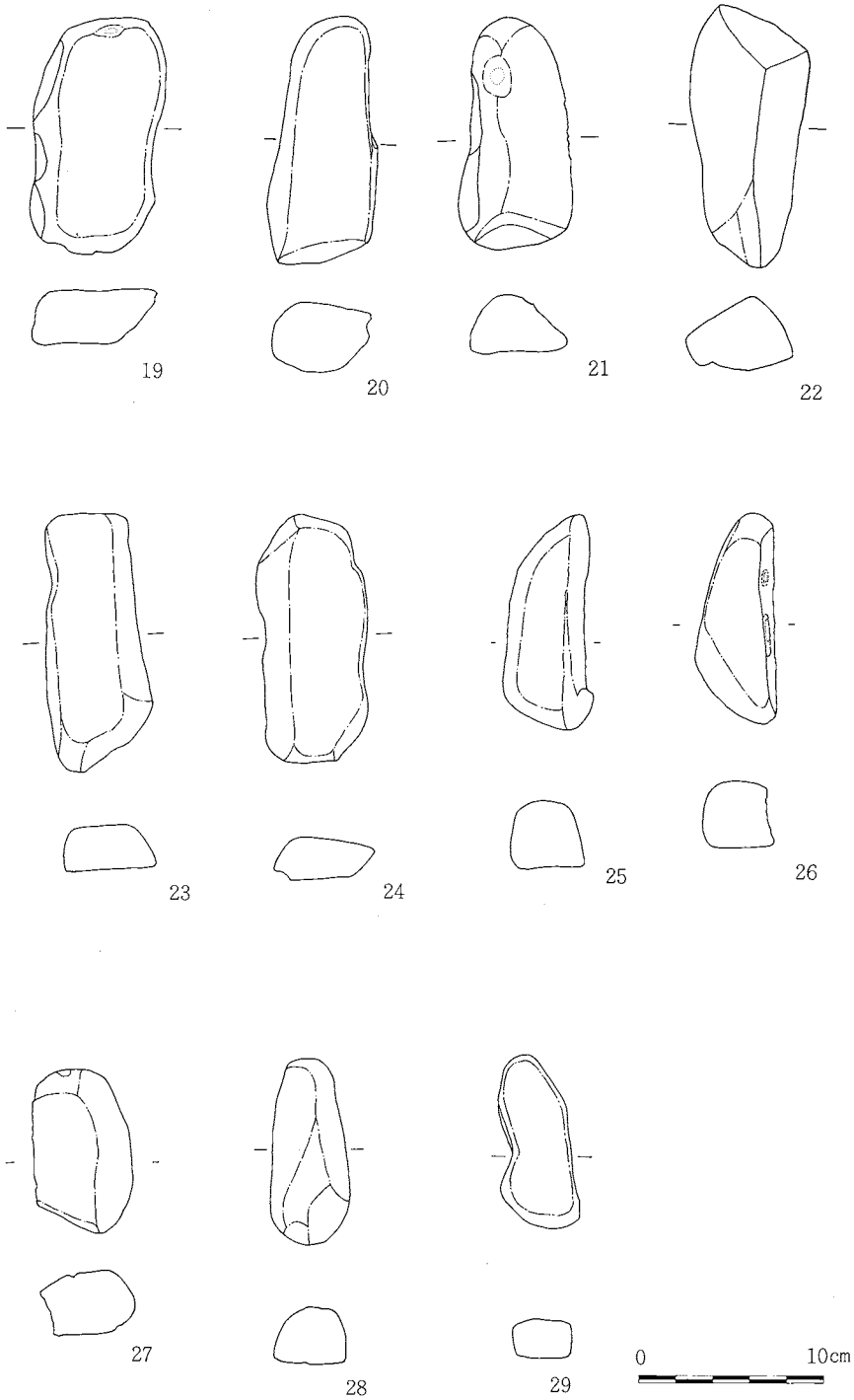
第20図 第11号住居址出土編み物用石錘 I の(2)

大きな移動はないものと考えられる。しかし、個々の編み物用石錘の出土状況が果して原位置を示すものか否かは判然とせず、ここでは、この3地点から出土したという記述のみにとどめておきたい。

第11号住居址から出土した編み物用石錘の形態は全体的におおよそ縦8~17cm、横3~7cm、厚さ2~5cm、重さ100~550gで正面からみると縦に長い長方形、もしくは楕円形で、側面からみると三角形、あるいは縦、横、(どちらか)一方に偏った楕円形を呈するものがほとんどである。

編み物用石錘の長さ、幅、重量と長さの関係を示したのが(第23、24図)である。これから具体的な大きさを探ってみる上で次のような分類が考えられる。Iのaグループ(1~11)、Iのbグループ(12~18)、IIのCグループ(19~24)、IIのdグループ(25~29)、IIIのeグループ(30~34)の5つである。I-aは11点で長さ12.5~16.7cm、幅5~7.2cm、重量350~630g、I-b7点では長さ8~11.7cm、幅4.8~6.8cm、重量120~280g、II-cは6点で、長さ12.5~14cm、幅5~6.5cm、重量290~480g、II-dは5点で長さ8.9~11.6cm、幅3.2~5.3cm、重量140~280g、III-eは5点で長さ10.7~15.7cm、幅3.5~5.8cm、重量100~830gをそれぞれ測った。

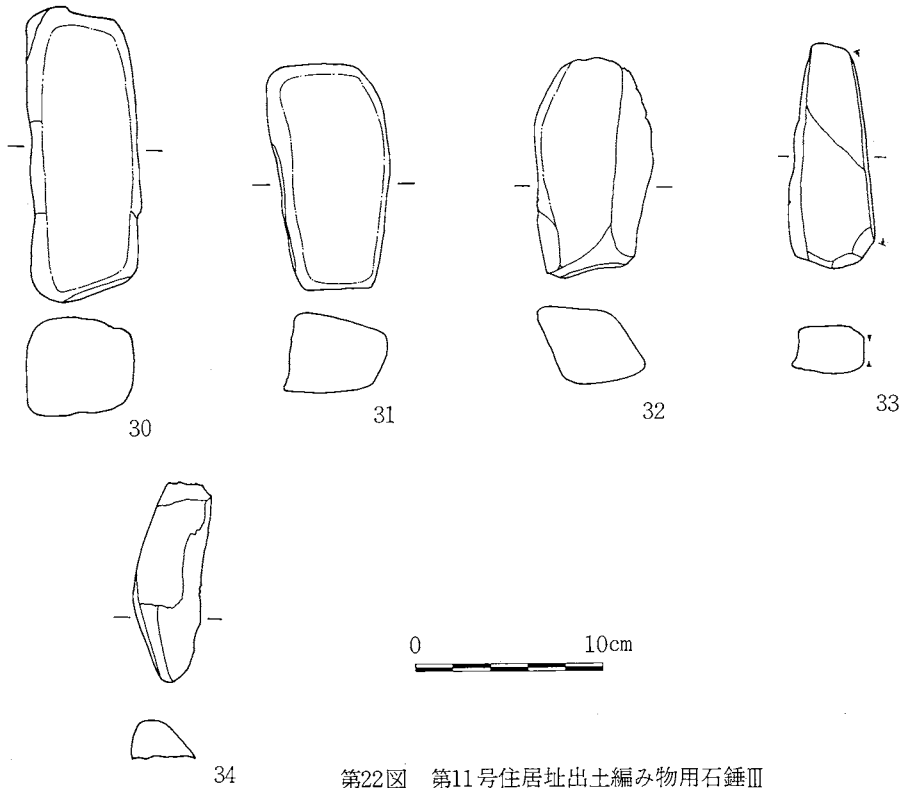
石質はI-aで細粒砂岩4・硬砂岩4・粘板岩1・頁岩1・安山岩1、I-bで細粒砂岩4・中粒砂岩1・硬砂岩1・頁岩1、II-cでは細粒砂岩2・中粒砂岩1・硬砂岩1・珪岩1・安山岩1、II-dでは細粒砂岩4・硬砂岩1、III-eでは細粒砂岩1・硬砂岩2・中粒砂岩1・頁岩



第21図 第11号住居址出土編み物用石錘Ⅱ

1を数えた。これを総計してパーセンテージを出してみると、細粒砂岩44%、硬砂岩26%、中粒砂岩9%、頁岩9%、安山岩6%、珪岩3%、粘板岩3%となり、特に砂岩が全体の80%近く占めていることは留意すべき点である。これらは亜円礫～亜角礫の中礫を利用したものである。

I-a・b、II-c・d、III-eの5つで一つの使用を前提としたグループとしてとらえることができるが、III-eに含まれるものは、大きさに比較的大きなバラつきがあり、一つのグループとしてとらえるのには、多少の無理があるかもしれない。しかしながら対象製品と編み物用石



第22図 第11号住居址出土編み物用石錘Ⅲ

錘の重量はグループと大きな関係があることは、重量と出土場所の関係などから十分考えられる。

渡辺誠氏の論文「編み物用錘具としての自然石の研究」(名古屋大学文学部研究論集、1981)の中でも製品群と重量の関係について言及している章があり、「質量の高い石錘を選別的に利用していることが明確」であり、「素材をみきわめて使い分けを行っている」とし、道具としての自然石を強調している。また11号住居址内の編み物用石錘の中には4例ほど以前磨製石斧や凹石に用いられたものが確認できる。これらの遺物は当時の人々が過去の道具の価値を認めず、またたとえ認めていたにしろ不必要なものと思われ、新たな道具として転用していた事実を物語る。中には9のように凹石、磨製石斧、編み物用石錘と三段階の変化を遂げた例も一例ではあるが確認できる。

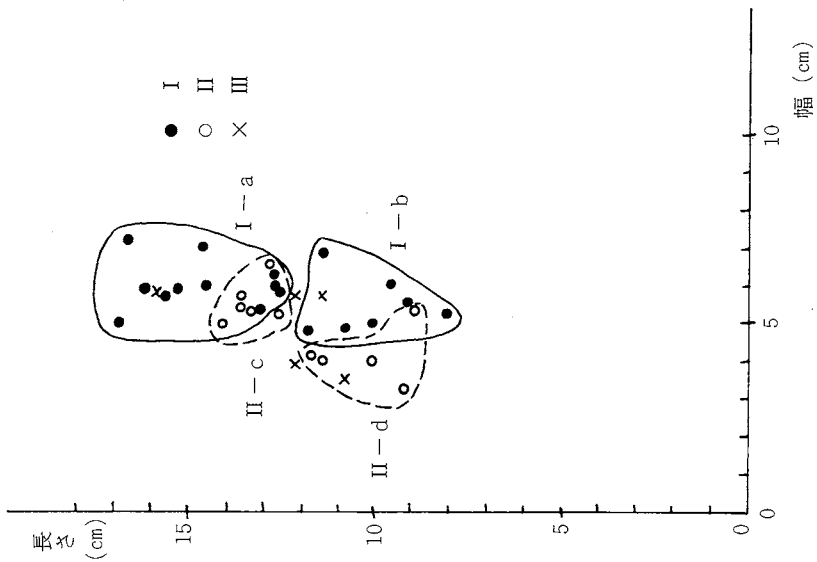
ところで編み物用石錘の出土した第11号住居址は11.5×10mと平出遺跡においても極めて大きな住居址であり、5組程度の編み物用石錘を使用した作業場ではなかったかと推測されるのである。ここで用いた編み物用石錘とは、俵や蓆などを編むときに用いるものである。その名称は「こも石」、「こもで石」、「編み物石」、「編み物用石錘」といろいろあるが、ここでは「編み物用石錘」という名称を用いた。「それは、これまでの『石錘』とえば漁撈用の用途しか考えない立場から『錘具』としての機能をより重視する立場に立ち戻ろうとする試みである。(第六回平出考古学セミナー 竹内稔)」

(大竹庄司 深井幸人)

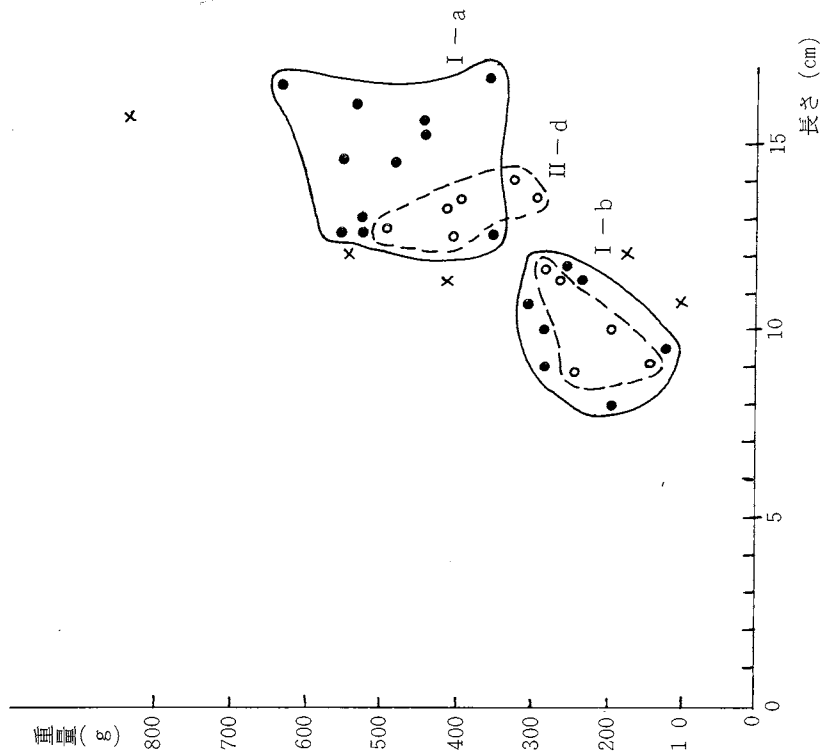
第1表 第11号住居地出土編み物用石錘一覧表

(単位 cm、g)

図番号	No.	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
第 19 図	1	12.6	6.0	4.3	550	粘板岩	凹石転用 磨製石斧、凹石転用
	2	13.0	5.3	3.9	520	細粒砂岩	
	3	12.6	6.3	3.2	520	硬砂岩	
	4	14.5	7.0	3.5	550	細粒砂岩	
	5	15.0	5.9	4.3	530	硬砂岩	
	6	16.5	7.2	3.5	630	細粒砂岩	
	7	14.4	6.0	4.0	480	頁岩	
	8	15.5	5.7	3.2	440	細粒砂岩	
	9	15.2	5.8	3.3	440	安山岩	
	10	16.7	5.0	1.9	350	硬砂岩	
	11	12.5	5.8	2.2	350	〃	
	12	9.0	5.5	2.9	280	細粒砂岩	
第 20 図	13	10.0	5.0	4.0	280	〃	欠けている 欠けている
	14	11.3	6.8	2.5	230	頁岩	
	15	11.7	4.8	3.5	250	細粒砂岩	
	16	10.7	4.9	3.6	300	〃	
	17	8.0	5.2	2.3	190	中粒砂岩	
18	9.5	6.0	2.0	120	硬砂岩		
第 21 図	19	12.7	6.5	2.9	480	細粒砂岩	凹石転用
	20	13.2	5.3	3.7	410	中粒砂岩	
	21	12.5	5.2	3.0	400	安山岩	
	22	13.5	5.7	4.0	390	珪岩	
	23	14.0	5.0	2.3	320	硬砂岩	
	24	13.5	5.4	2.5	290	細粒砂岩	
	25	11.6	4.1	3.6	280	〃	
	26	11.3	4.0	3.6	260	〃	
	27	8.9	5.3	3.3	240	硬砂岩	
	28	10.0	4.0	3.0	190	細粒砂岩	
	29	9.1	3.2	2.1	140	〃	
第 22 図	30	15.7	5.8	5.3	830	硬砂岩	
	31	12.0	5.7	4.2	540	中粒砂岩	
	32	11.3	5.7	4.0	410	硬砂岩	
	33	12.0	3.9	2.5	170	細粒砂岩	
	34	10.7	3.5	2.0	100	頁岩	



第23図 編み物用石錘の長さの幅との相関



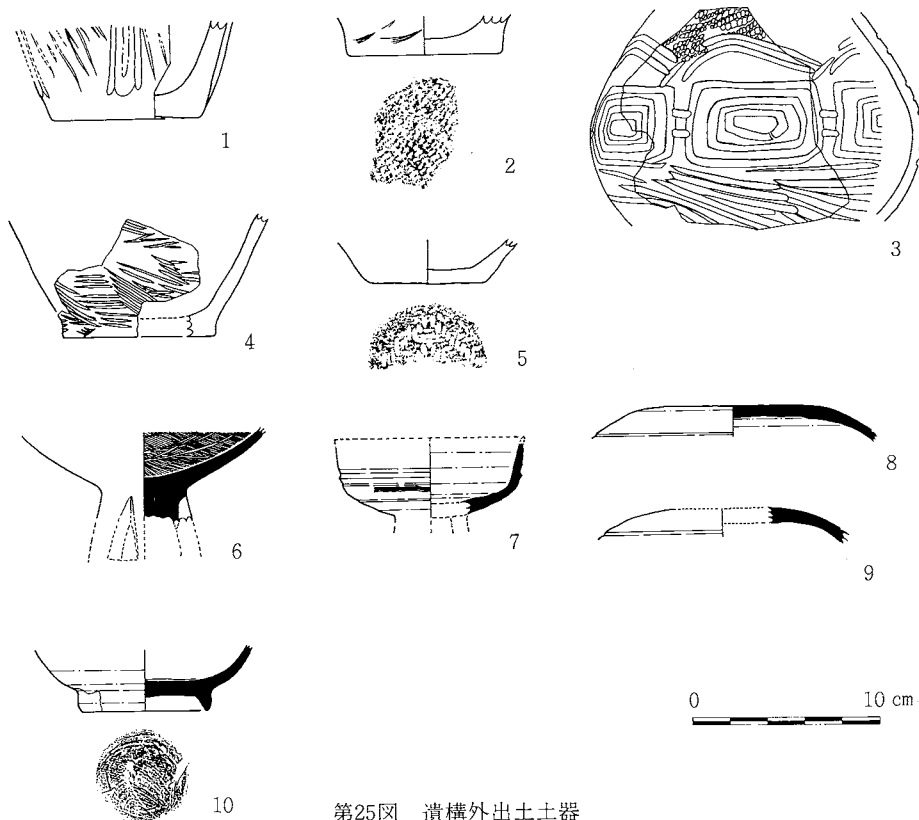
第24図 編み物用石錘の重量と長さの相関

第3節 遺構に伴わない遺物

(1) 土器

1) 縄文土器 (第25図1、第26図) 遺構外からは、縄文土器片が数十点、OトレンチとKトレンチを中心に出土した。第25図1はナ号住居址付近から出土した深鉢の底部であるが、ナ号住居よりも少し新しい時期のものと考えられる。第26図の拓本は遺構外出土の土器片で、10~12と20は、沈線の区画による磨消縄文で、10~12は中期終末~後期初頭、20は後期初頭のものとして推定される。また13~16は櫛状工具による沈線文様で、13、14は波状を、15、16は直線を描いており、中期終末にあたるものと推定される。 (前田清彦)

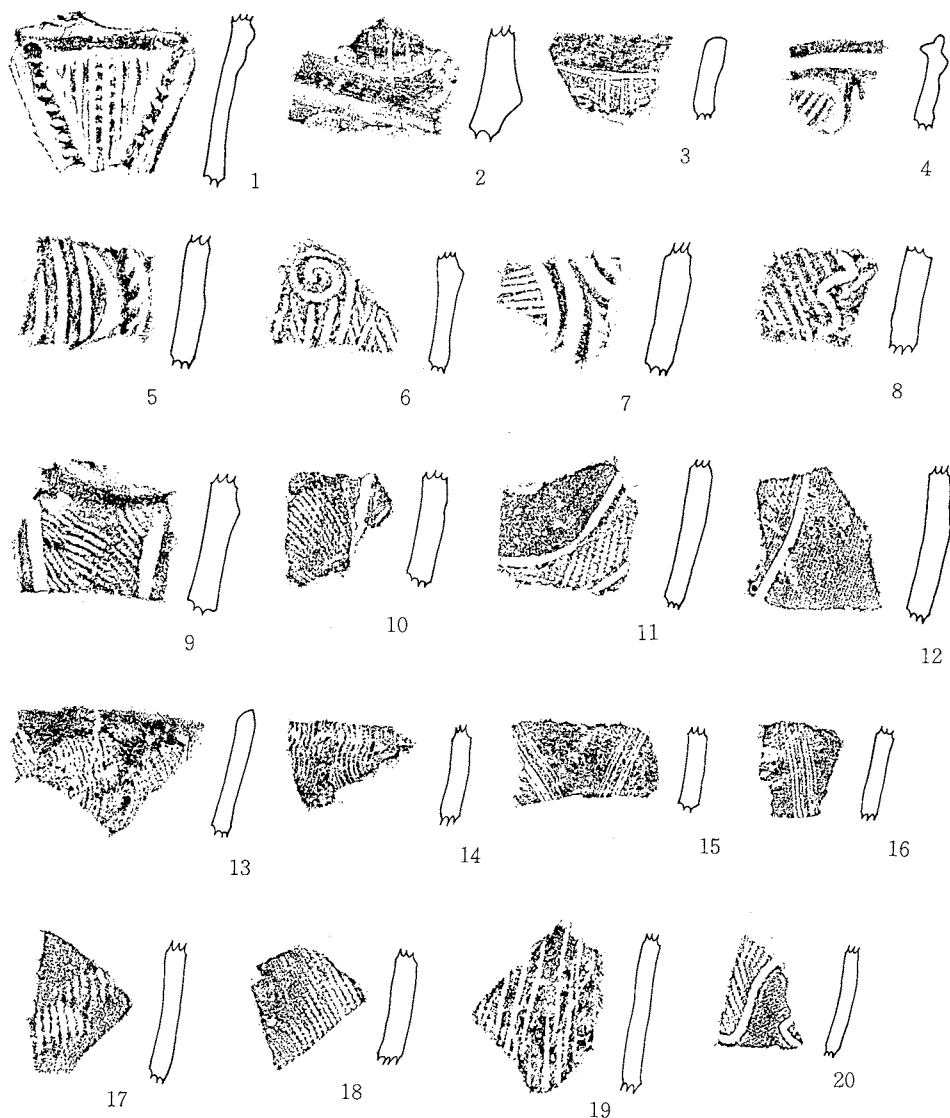
2) 弥生土器 弥生土器は、KおよびOトレンチから主として出土し、第2号住居址東、第61号住居址南側にそれぞれ比較的集中性がみられた。これらの土器は、神村透氏の教示によると寺所



第25図 遺構外出土土器

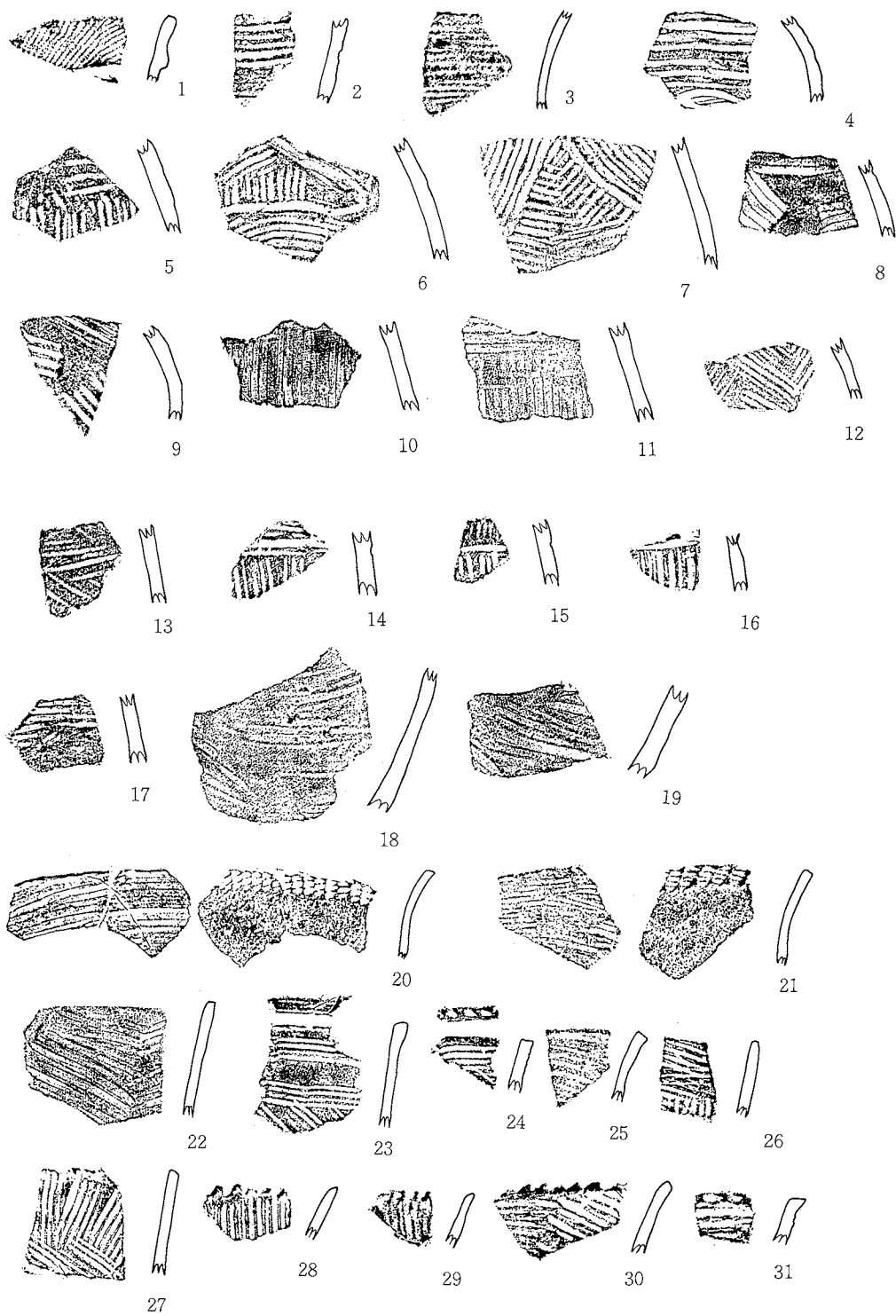
式に比定されるものであり、器形により壺、鉢の2種に分けられる。

壺形土器（第25図3、第27図1～19）1は口縁部、2は頸部で、1には縄文が、2・3には横位の沈線をめぐらす。第27図、4～17は胴部破片である。第25図は胴部の文様構成がある程度知ることができる破片で、胴部中央に6単位と考えられる雷文がめぐり、この上位に山形の沈線文が2条施文され、その空間を埋めるようにして縄文が施される。胴部以下は右下がりの条痕文となる。暗褐色で、焼成は良い。胴部径18cm。4～9は条痕状の連続、沈線を斜位、横位、羽状に組み合わせた文様構成をもつもので、14～16は縦位のものである。10・11は、条痕文である。



0 5 cm

第26図 遺構外出土縄文土器

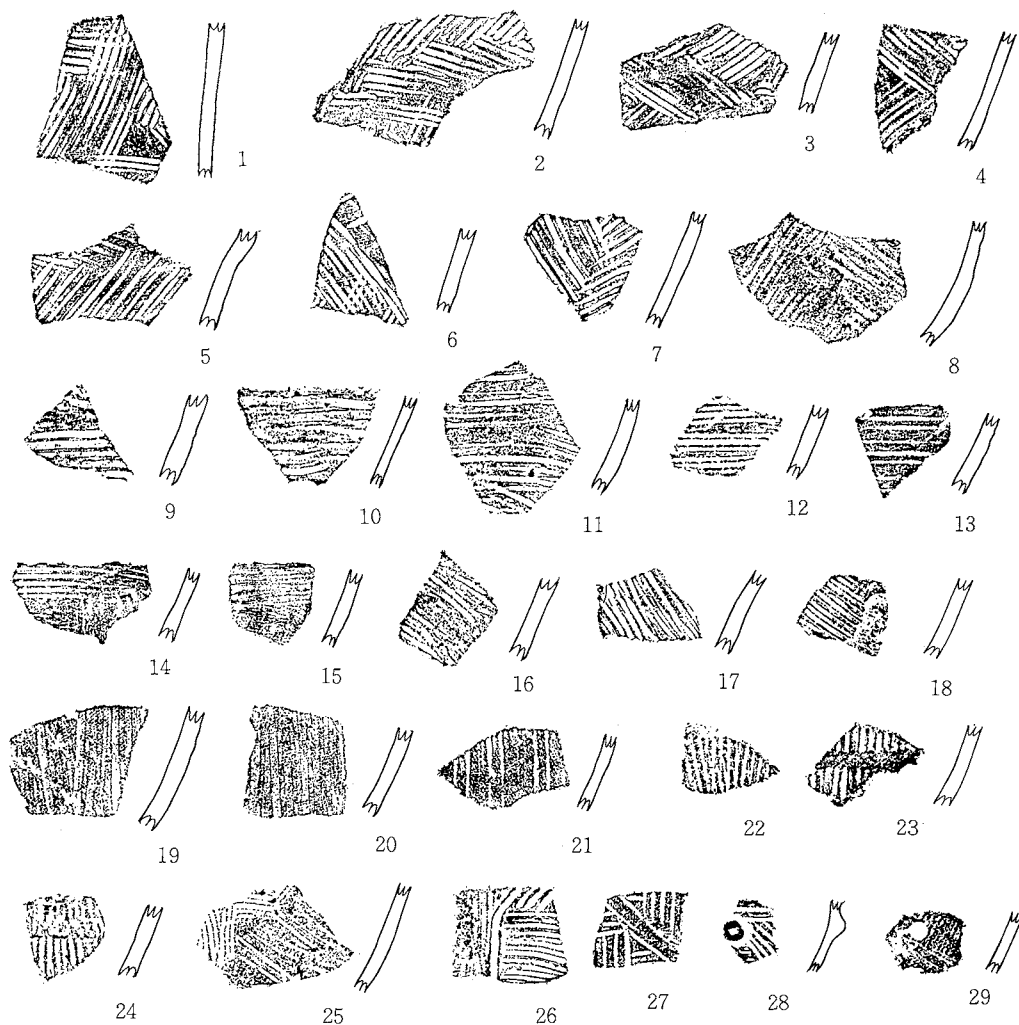


第27图 遺構外出土弥生土器(1)



18・19は胴下半部で斜位の条痕文を施す。

鉢形土器（第27図20～31、第28図1～26）20～31は口縁部破片である。20、21は外面に条痕文を、内面に櫛歯状工具による連続押引文が施される。22、25は条痕文を、23、24は平行および斜位の沈線文を施文し、口唇部には沈線ないしは刺突文を施文する。28、29は縦位の条痕文と口縁端への刻みを組み合わせた文様で、30は口唇部を刻む。31は口唇部をつまみ上げ肥厚させている。第28図1～27は胴部破片である。1～6は横位羽状の条痕文で、7、8は縦位の羽状を呈する条痕文を施文する。9～15は横位平行に、16～18は右下がりの斜位に、19～24は縦位平行にそれぞれ条痕文を施す。25～26は、横位、斜位、縦位の沈線を組み合わせ特異な文様を描出している。28



第28図 遺構外出土弥生土器2)



はボタン状貼付文で、29は穿孔がみられる。

壺形、鉢形ともに暗褐色を呈し、焼成良好のものが大半を占める。

平出遺跡の過去の調査結果によれば、今回弥生土器が出土したK、Oトレンチ周辺はかなり濃密に弥生土器の散布が認められている。現在までそれと疑わしい第34号住居址を除けば、住居址・土壌等の遺構の検出はまだない。今後の調査ではこれらの土器が伴う遺構を検出し、該期の中心部分を確定し平出遺跡における弥生時代の特性を明らかにする必要がある。（小林康男）

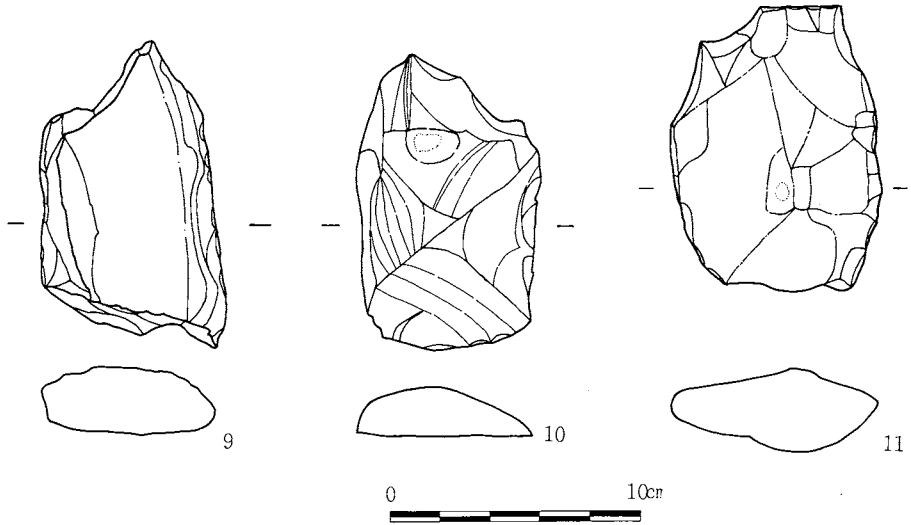
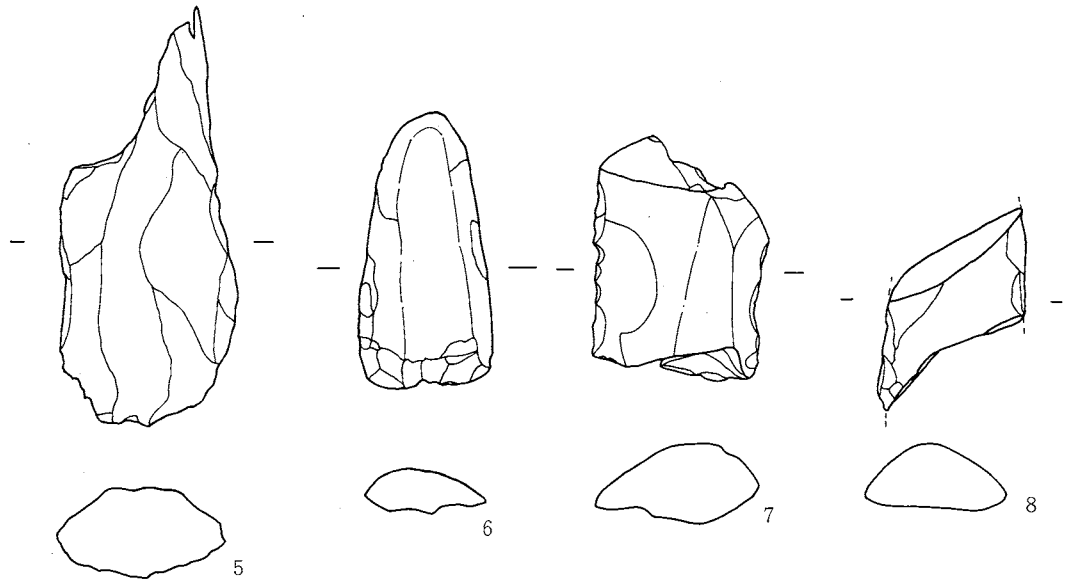
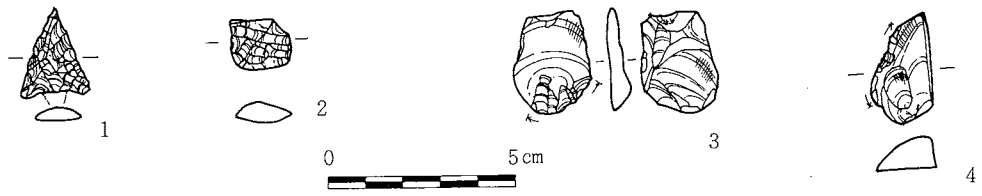
3)土師・須恵・灰釉 古墳時代以後の土器片は遺構外でも多量に出土したが、実測可能なものは5点のみであった(第25図)、6は土師器の高坏で三角形のすかしが三ヶ所にあったものと推測される。内面には非常に細長い暗文が施され、黒色処理がなされている。7は須恵器の高坏で、口縁部と脚部を欠損しており、内面と外面上半部がロクロナデ、外面下半部が回転ヘラケズリの整形ではあるが、器面のロクロナデによる稜はかなり鋭い。8、9は共に須恵器の蓋で、ロクロナデ、回転ヘラケズリの整形をしており、つまみが無く、一本の溝が引かれているのが特徴である。10は釉の坏で、整形は器面がロクロナデ、底部が回転糸切りの後にロクロナデをして仕上げられている。（前田清彦）

(2)石器 (第29、30図)

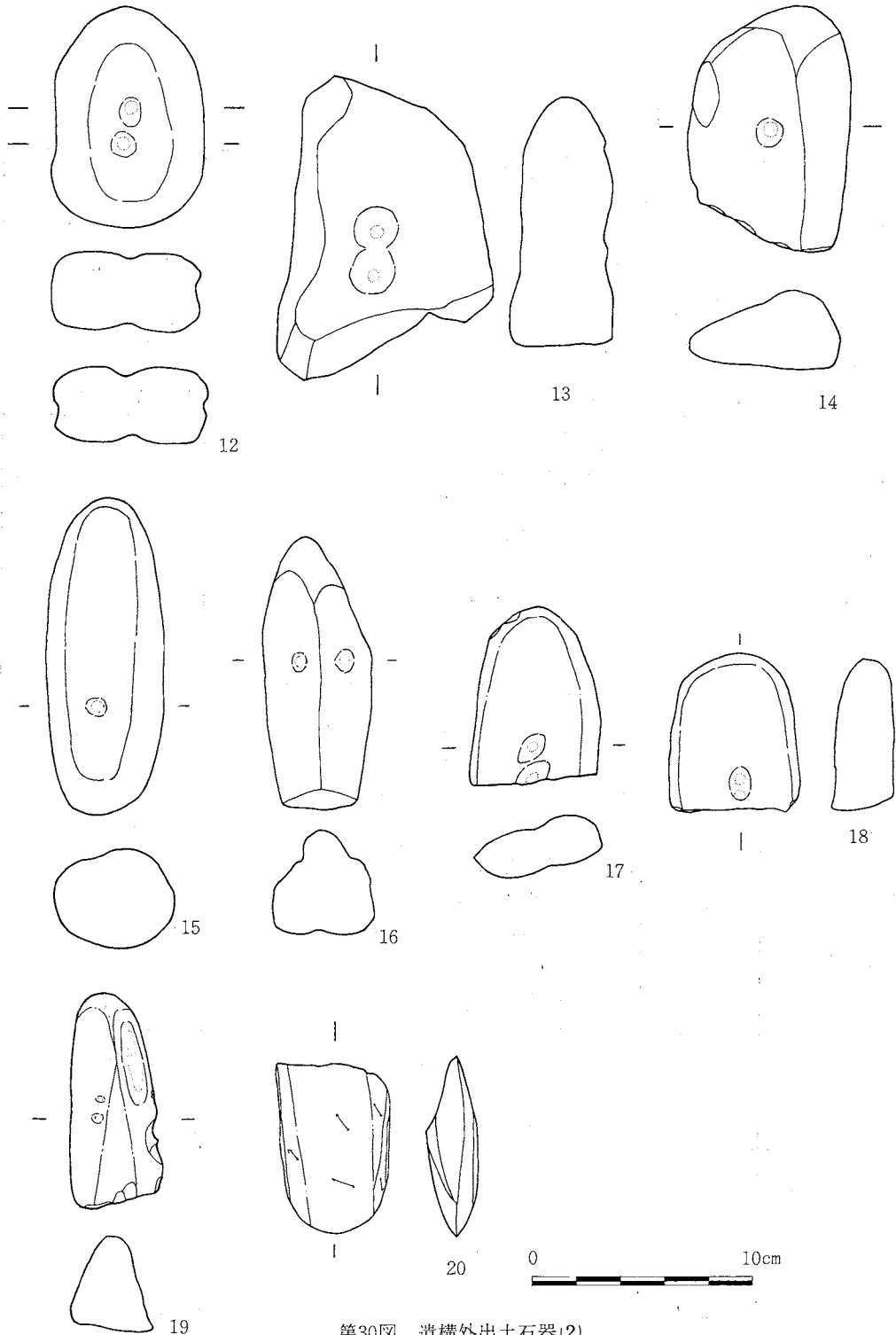
石鏃1点、不定形石器3点、打製石斧7点、凹石8点、磨製石斧1点が出土している。石鏃は2号住居覆土から出土した黒曜石製の有茎石鏃一点のみであり、片面は自然面を多く利用した二等辺三角形の丁寧な作りであるが、茎部は欠損している。不定形石器はJトレンチから3点出土している。いずれも黒曜石製であり、2は石鏃の可能性があり、3、4は簡単な剝離によって刃部を作りだしただけの粗雑な加工である。打製石斧5～11は第11号住居址覆土とナ号住居覆土の2ヶ所に集中して出土した。ほとんどが部厚く雑な剝離の加工であるが、完形品6は、片面に自然面を多く残し、もう片方に剝離を重ね、やや薄く加工されている。凹石は全部で8点出土し、石材は12の安山岩を除けばすべて砂岩で、13、14が中粒砂岩、15～18が細粒砂岩、19が硬砂岩である。凹みの数は、14、15が1ヶ所に凹みを有し、17、18が一面に2つの凹みを有し、19は三角錐状の自然石の三面のうち二面に凹みを有し、16は三角錐状の三面のすべてに1つずつ凹みを有している。また、12、13は凹みの数が多く、13は表裏に2つずつ有し、12は表裏に2つずつと側面片方に2つ、そしてもう片方に1つと全部で7つの凹みを有している。磨石石斧20は中粒砂岩製で、定角式の刃部破片であり、研磨は両縁が縦に胴中央は斜めに、そして刃部付近は横になされている。

これら縄文時代の遺物は、第11号住居址覆土や第2号住居址覆土など、古墳未の住居址上からかなり出土しており、調査区付近が耕作によりかなりの攪乱を受けていることをうかがわせる。

(前田清彦)



第29図 遺構外出土石器(1)



第30图 遺構外出土石器(2)

第2表 出土土器一覧表

(単位 cm)

遺構番号	No.	種別	器種	法量			色調		成形・調整の特徴	備考
				器高	口径	底径	内面	外面		
第2号17住居区	1	土師	坏	4.4	12.8		黒色	暗赤褐色	内面ヘラミガキ・外面ハケナデ→ヘラミガキ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面黒色処理
	2	〃	〃		16.6		明橙褐色	明橙褐色	ヘラミガキ	一部に黒色、赤色塗料付着
	3	〃	〃	3.7	10.6		淡赤褐色	淡赤褐色	内面ヘラミガキ・外面板状工具によるココナテ底部板状工具によるケズリ	外面に指圧痕有り
	4	〃	小形壺		10.9		黒色	赤褐色	内面ヘラミガキ(一部分その前にハケナデ)・外面ヘラケズリ→ヘラミガキ	
	5	須恵	蓋付坏		10.8		青灰色	青灰色	外面下半部皿縁ヘラケズリ、他ロクロナデ	ロクロは逆時計回り
	6	土師	甕		15.2		明褐色	明褐色	内縁部と口縁部縁位のハケナデ・外面縁位のハケナデ	
	7	〃	〃			9.7	〃	〃	内面ハケ目・外面ヘラナデ	輪積み痕有り
第61号9住居区	1	土師	坏	6.4	9.6	3.0	暗褐色	暗褐色	内面ハケナデ・外面ハケナデ→ヘラミガキ・底部ヘラケズリ	
	2	〃	小形坏		12.8		淡黄褐色	淡黄褐色	ハケナデ	
	3	〃	甕		19.2		淡褐色	淡褐色	内面縁位のハケ目・外面縁位のハケ目・口縁部縁位のハケナデ	
	4	〃	〃			8.4	明褐色	明褐色	ハケ目・底部内面はハケナデ	
	5	〃	〃		18.7		赤褐色	赤褐色	外面口縁部ヘラケズリ→ヘラナデ・他ハケナデ	
	6	〃	〃		14.5		暗黄褐色	暗黄褐色	口縁部ハケナデ・胴部ヘラミガキ	
	7	〃	〃				暗褐色	暗褐色	内面ハケ目・ヘラケズリ→ヘラミガキ・内面底部ハケ目・外面ハケ目→ヘラミガキ	
	8	須恵	蓋付坏		11.9		青灰色	青灰色	外面下半部皿縁ヘラケズリ・他ロクロナデ	
第13号62号14住居区	1	土師	坏	2.8	15.1	7.0	赤褐色	明褐色	ヘラミガキ	
	2	〃	坏		14.8	7.0	黒褐色	黒褐色	内面上半部、外面下半部ヘラナデ・内面下半部、外面上半部ハケナデ	
	3	〃	坏			7.0	赤褐色	赤褐色	ヘラミガキ	
	4	〃	坏		15.4		黒色	〃	内面ミガキ、暗文・外面ハケナデ	内面黒色処理
	5	〃	坏		15.3		〃	茶褐色	〃 外面ヘラミガキ	内面黒色処理
	6	〃	坏	10.9	15.1	14.6	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁部ハケナデ・内面ヘラミガキ、ヘラナデ→ヘラケズリ・外面ヘラケズリ→ヘラナデ、ヘラミガキ	穴径29
	7	〃	小形甕	11.2	11.8	5.6	明褐色	暗褐色	内面ハケナデ・外面ヘラケズリ	
	8	〃	甕	22.3	16.1	7.2	暗褐色	〃	口縁部ハケ目・他ヘラケズリ	口縁部内外面に炭化物付着
	9	〃	甕				明褐色	明褐色	ヘラミガキ	外面に炭化物付着
	10	〃	甕			8.5	暗褐色	暗褐色	内面ハケナデ・外面ヘラナデ	
	11	〃	甕			18.0	茶褐色	茶褐色	ハケナデ	
	12	〃	甕				〃	赤褐色	内面ハケナデ→ヘラケズリ・外面ヘラケズリ	
	13	〃	甕			20.0	明褐色	明褐色	口縁部と内面ハケナデ・外面ハケ目	
	14	〃	甕	18.1		6.3	橙褐色	橙褐色	ハケナデ	
遺構25外区	6	土師	高坏				黒色	明褐色	内面ミガキ、暗文・外面ミガキ	すかし三ヶ所に有り 内面黒色処理
	7	須恵	〃				青灰色	青灰色	ロクロナデ・外面一部皿縁ヘラケズリ	
	8	須恵	蓋				灰白色	〃	〃	つまみ無し
	9	〃	〃				青灰色	〃	〃	〃
		灰釉	坏				白色	乳白色	ロクロナデ・回転糸切り→ロクロナデ	

第3表 出土石器一覧表

(単位 cm、g)

図番号	J6	遺構名	種別	長さ	幅	厚さ	重量	欠損	石材	備考
第6図	11	ナ号住居	石皿	(18.3)	16.5	11.5	2715	欠	安山岩	
第14図	15	62号住居	砥石	(21.2)	16.2	4.9	2216	欠	細粒砂岩	
第29図	1	遺構外	石鏃	(2.2)	1.8	0.3		欠	黒曜石	
	2	〃	不定形石器	(1.3)	1.6	0.5		欠	〃	
	3	〃	〃	2.6	2.0	0.5		完	〃	
	4	〃	〃	3.0	1.7	0.8		完	〃	
	5	〃	打製石斧	(15.5)	6.5	3.6	(330)	欠	頁岩	
	6	〃	〃	10.7	4.9	1.6	160	完	硬砂岩	
	7	〃	〃	(9.0)	7.0	3.6	(240)	欠	安山岩	
	8	〃	〃	(3.8)	6.0	2.5	(100)	欠	頁岩	
	9	〃	〃	(11.8)	7.1	2.6	(320)	欠	粘板岩	
	10	〃	〃	(11.5)	6.9	2.0	(180)	欠	頁岩	
	11	〃	〃	(11.4)	8.2	3.5	(320)	欠	細粒砂岩	凹有り
第30図	12	〃	凹石	10.0	6.6	3.4	380	完	安山岩	凹は表裏に各2つ 側面片方2つ、片方に1つ
	13	〃	〃	(13.6)	8.5	5.7	(850)	欠	中粒砂岩	凹は表裏に各2つずつ有り
	14	〃	〃	(11.1)	7.2	3.5	(350)	欠	〃	凹は1ヶ所
	15	〃	〃	14.4	5.1	4.5	535	完	細粒砂岩	凹は1ヶ所
	16	〃	〃	12.5	4.9	4.7	280	完	〃	凹は三面に各1つずつ有り
	17	〃	〃	(7.8)	5.7	2.2	(150)	欠	〃	凹は一面に2つ有り
	18	〃	〃	(7.0)	6.0	2.6	(180)	欠	〃	凹は一面に2つ有り
	19	〃	〃	9.5	3.8	4.3	190	完	硬砂岩	凹は三面中二面に各1つ有り
	20	〃	磨製石斧	(7.7)	5.0	2.3	(140)	欠	中粒砂岩	定角式

第Ⅳ章 結 語

この遺跡は、過去に於て大々的に発掘調査され、縄文時代中期から、土師式土器の伴う平安時代の遺跡であることは、つとに早くより知られていて、国の史跡に指定された重要な遺跡であるが、今回発掘調査されたのは、平出遺跡の環境整備事業に伴ない整備計画資料を得るためのものである。

発掘調査面積は、限定された822平方メートルで、現復原家屋に隣り合った、遺跡の中心部に近い場所であった。時期も大体農作業も済んだ十一月下旬、霜の降りる寒い日をついて、トレンチ方式により、発掘調査を進めた。調査結果は、縄文時代中期の住居址1、古墳時代の住居址5、平安時代の住居址1という結果であった。その中で、過去に既に発掘調査され、報告されているもの3、一部発掘調査されたもの1の合計4住居址で、残りの3住居址は新たに発掘したものである。ここで不思議に思えることは、過去の発掘に於ても、今回の発掘に於いても、弥生時代の住居址が全く見られないことです。但し遺物においては、それらしき壺や、破片が出ているので、弥生時代の遺跡は皆無とはいえない面があり、いつれ解明されることもあろうかと思う。

尚11号住居址は一辺が11米という大きなもので、過去に既に発掘調査済みのものであるが、今回再発掘してみると、極めて温存度が高く、過去の発掘、埋め直しが完全に行き届いていたことを物語るものとして、高く評価したいと思う。

また、今回の調査の主目的であった復原家屋建設のための遺構の検出については、幸い第62号住居址1軒ではあったが、極めて保存の良い状態で発見することができ、また古墳時代を中心とした住居址群の在り方ある程度把握することができるなど、一応の成果を得ることができた。

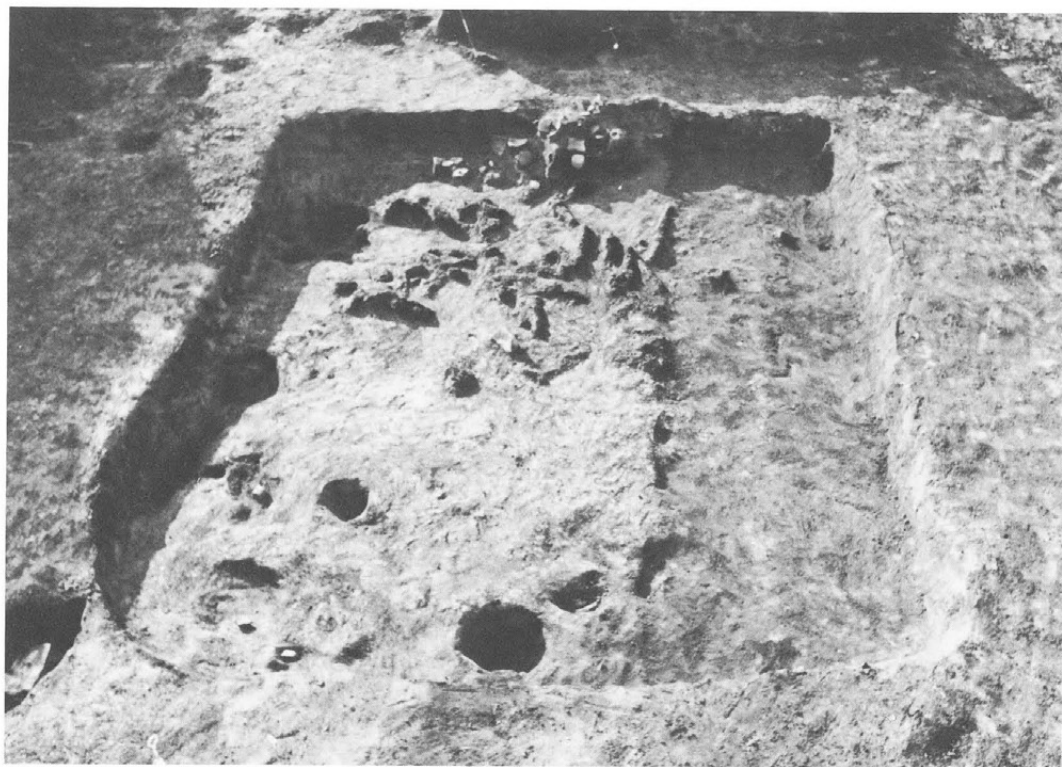
最後に地権者の方々及び発掘に参加されたの方々に対し、御協力厚く御礼申し上げます。

(花村 格)

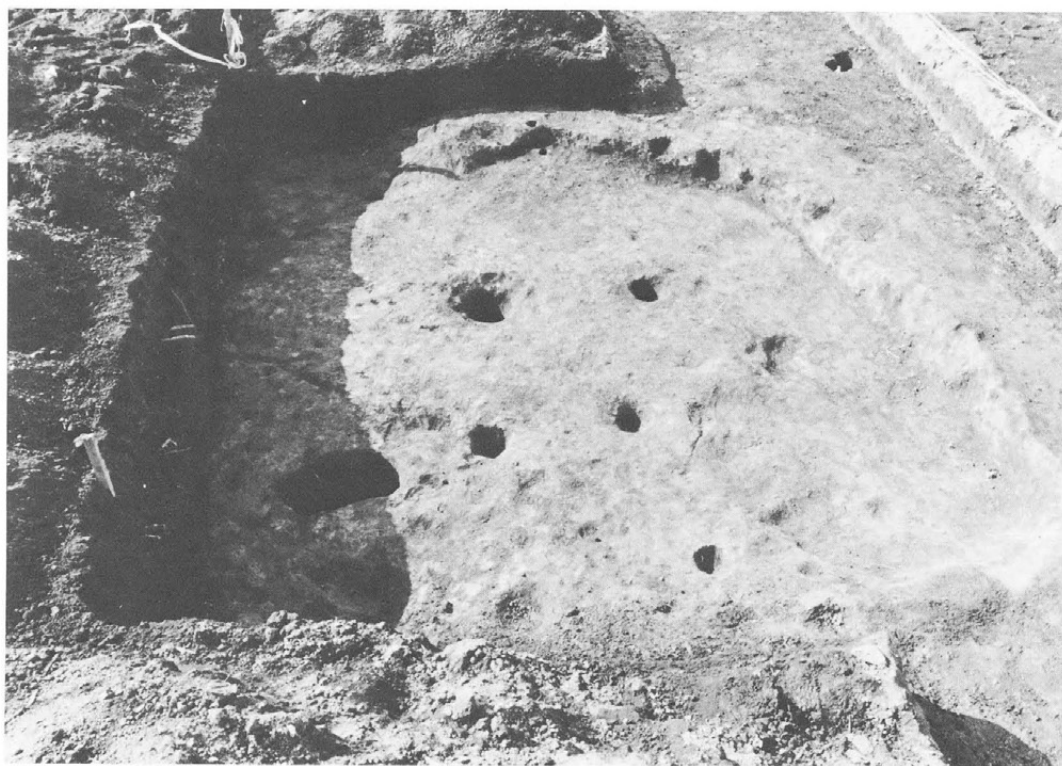
圖 版



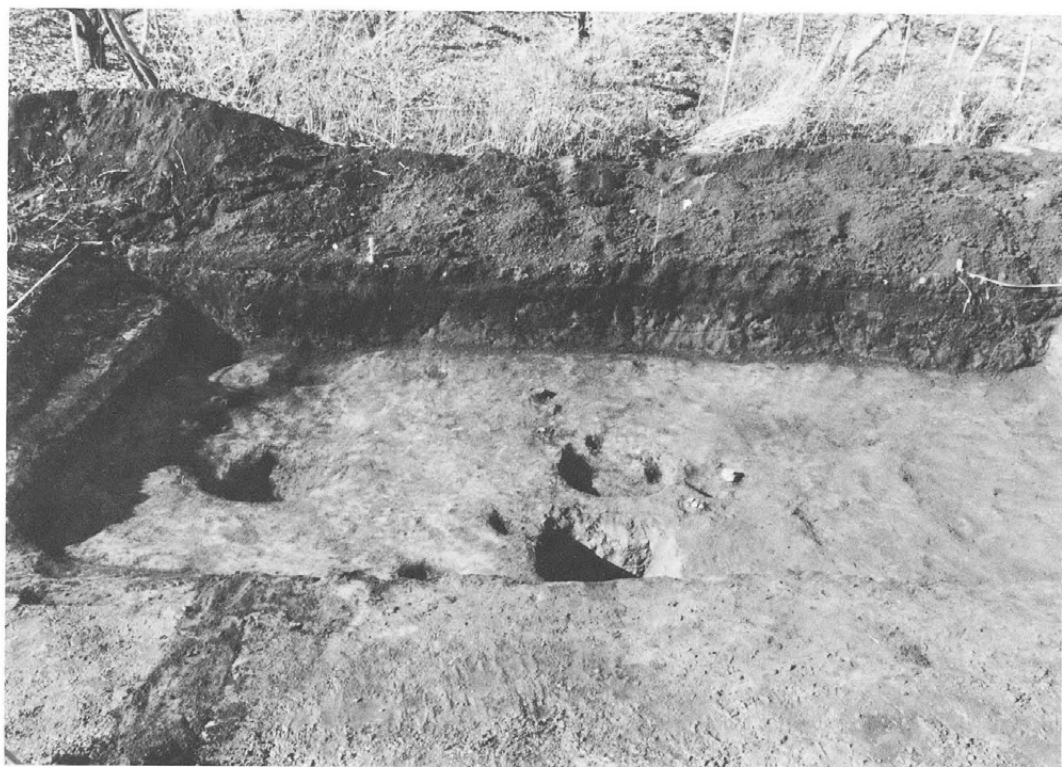
上：調査地域全景 下：第ナ号住居址



上：第61号住居址 下：第62号住居址



上：第62号住居址カマド 下：第1・22号住居址



上：第2号住居址 下：第11号住居址

史跡 平出遺跡

— 昭和57年度発掘調査報告書 —

昭和58年 3 月20日 印刷

昭和58年 3 月25日 発行

発行 長野県塩尻市教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社

